

東北学院礼拝説教集 第5号

〈特集〉

あい



知識は人を高ぶらせるのに対して、
愛は人を造り上げます。

(コリントの信徒への手紙一 8章1節)

表紙イラスト・挿絵 ひぐちけえこ

<特集>

あ い



東北学院礼拝説教集 第5号

2025年2月

東北学院宗教センター発行

目次

第五号発刊にあたって

原田 浩司
……………

6

副題「あい」について

佐藤 由子
……………

7

大切なものから入れなさい

コリント信徒への手紙一 一三章一〜九節

大西 晴樹
……………

8

愛はいつばい

ヨハネの手紙一 四章一六節

島内久美子
……………

14

キリストの愛に押し出される歩み

マルコによる福音書 一〇章四六〜五二節

松井 浩樹
……………

18

心の目

ヨハネによる福音書 九章一〜一二節

成 智圭
……………

22

神の愛の中で自己を見出す

マルコによる福音書 一章三二～三四節

西間木 順 ……

26

同情と共感

マルコによる福音書 六章三〇～三四節

吉田 新 ……

30

人の心と神の愛

マルコによる福音書 四章一～九節

川島 堅二 ……

34

無条件の愛・無償の愛

ヨハネの手紙一 四章七～一一節

木村 純二 ……

40

愛のゆえに

申命記 七章六～八節

田島 卓 ……

46

「人になれ」…東北学院という「愛」

マタイによる福音書 二二章三四～四〇節

藤野 雄大 ……

50

見守る愛

マタイによる福音書 二二章一八～三二節

渡邊 有美 ……

54

愛を体験する！

ヨハネの手紙一 四章七～一六節

椎名雄一郎
……

58

東北学院で学ぶ者として

ペトロの手紙一 一章一～二節

大門 耕平
……

64

愛によって変えられた心——ザアカイの再出発——

ルカによる福音書 一九章一～一〇節

渡邊 蘭子
……

70

真ん中に出なさい

ルカによる福音書 六章八節

松村 尚彦
……

74

人生を変える秘訣

マタイによる福音書 一四章一七～二二節

大澤 史伸
……

78

「よく生きる」ということ

ルカによる福音書 一〇章二五～三七節

齋藤 渉
……

84

良い言葉を聴こう！

マルコによる福音書 七章三一～三七節

瀬谷 寛
……

90

迫り来る神の愛

ミカ書 四章一一～一四節

中本 純
……

94

愛し、愛されて生きる

詩編 八四編一～二三節

佐藤 由子
……

100

光は今も輝いている

イザヤ書 九章一節

高田 恵嗣
……

106

光が世に来た

ヨハネによる福音書 三章一六～二二節

江間紗綾香
……

114

荒野の果てに

ルカによる福音書 二章八～二二節

原田 浩司
……

122

あとがき

原田 浩司
……

130

第五号発刊にあたって

二〇二四年度に東北学院の各設置校の礼拝において語られた説教の中から、キリスト教教育に従事する宗教主任や、本院の理事を務める牧師、また本大学を卒業後に東京神学大学・大学院に進学して牧師となった方々によって語られたクリスマス説教など、数々の説教を、皆さんにお届けします。本年度は東北学院のスクールモットー「LIFE LIGHT LOVE」より「LOVE（愛）」をテーマに、各先生方に寄稿していただきました。

東北学院の各設置校で日々語られる説教は、その時その時の聴き手である生徒や学生、園児たちが置かれた状況の中で語られる聖書のメッセージですから、ここに収録された説教、あるいは収録されなかった説教には、自ずと今年一年をとおした身近な出来事や自然災害への言及がしばしば見られます。それは、大地震や豪雨被害など、自然災害において苦難・困難に直面する人々に対し、イエス・キリストが示す「隣人愛（LOVE）」の大切さ、その必要性、その意義を伝えてきた、一年間のキリスト教教育の軌跡です。

東北学院は「LIFE LIGHT LOVE」を教育の羅針盤とするキリスト教学校です。これまで刊行してきた説教集（特に第三号、第四号）と合わせ、東北学院のキリスト教教育の神髄に、本説教集をとおして触れていただければ幸いです。

（宗教センター主任 原田浩司）

副題「あい」について

みなさんが、もしラブレターを書くとしたら、どんな書き出しの言葉を選ぶでしょうか？聖書は、神様からのラブレターであると言われていますが、その書き出しは、「初めに、神は天地を創造された。」です。

聖書のメッセージの大前提は、神様がこの世界と私達ひとりひとりに対して、特別な愛をもっておられるということです。聖書には「主は母の胎にいる時から私を呼び 母の腹にいる時から私の名を呼ばれた。（イザヤ書四九章一節）」とあります。私達が生まれる前から、私達のことを知り、私達を特別な存在として愛しておられるのは、この世界の造り主である、天地創造の神様です。

この神様の愛を、私達が本当の意味で知ることができるようにと、神様は、その独り子である、主イエス・キリストを私達のもとに贈って下さいました。イエス様は、神様から私達へのプレゼントなのです。

本号は「LIFE（命）」「LIGHT（光）」に続く、「LOVE（愛）」の特集です。東北学院では、聖書にあふれている「神の愛」が、少しでも皆さんの心に届くことを願って、毎日の礼拝の中で、聖書の言葉が語られています。

短い礼拝の中では、お伝えできないことも沢山ありますので、ぜひ気になったことや疑問・質問については、いつでも礼拝や聖書を担当している先生方に聞いてみて下さい。また宗教センターでも、みなさんからの「声」をお待ちしています。この説教集を通して、新しい発見と出会いがありますように心からお祈りいたします。



大切なものから入れなさい

院長・学長・宗教センター所長 大西 晴 樹

コリント信徒への手紙一 一三章一〜九節

1た^{ひと}とえ、人々の異言^{いげん}、天使^{てんし}たちの異言^{いげん}を語^{かた}ろうとも、愛^{あい}がなければ、私^{わたし}は騒^{さわ}がしいどら、やかましいシンバル。2たとえ私^{わたし}が、預言^{よげん}する力^{ちから}を持ち、あらゆる秘義^{ひぎ}とあらゆる知識^{ちしき}に通^{つう}じていても、また、山^{やま}を移^{うつ}すほどの信仰^{しんこう}を持^もっていても、愛^{あい}がなければ、無^むに等^{ひと}しい。3また、全財産^{ぜんざいさん}を人^{ひと}に分^わけ与^{あた}えても、焼^やかれるためにわが身^みを引き渡^{わた}しても、愛^{あい}がなければ、私^{わたし}には何^{なん}の益^{えき}もない。

4愛^{あい}は忍耐^{にんたい}強い。愛^{あい}は情^{なさ}け深^{ふか}い。妬^{ねた}まない。愛^{あい}は自慢^{じまん}せず、高ぶ^{たか}らない。5礼^{れい}を失^{しつ}せず、自^じ分の利^り益^{えき}を求めず、怒^{いか}らず、悪^{あく}をたくらまない。6不正^{ふせい}を喜^{よろこ}ばず、真理^{しんり}を共^{とも}に喜^{よろこ}ぶ。7すべてを忍^{しの}び、すべてを信^{しん}じ、すべてを望^{のぞ}み、すべてに耐^たえる。8愛^{あい}は決^{けつ}して滅^{ほろ}びません。しかし、預言^{よげん}は廃^{すた}れ、異言^{いげん}はやみ、知識^{ちしき}も廃^{すた}れます。9私たちの知識^{ちしき}は一部分^{いちぶぶん}であり、預言^{よげん}も一部分^{いちぶぶん}だからです。

(聖書協会共同訳)

今読んだ聖書の箇所は、「愛の賛歌」といって結婚式のときによく読まれる聖書の箇所です。結婚という男女の愛のみならず、親子、家族、友人、勉強、部活、仕事、学校、職場、地域、故郷、祖国、趣味、ペット、等々に至るまで、生きることで、われわれは愛を抱き、愛に支えられて生きています。愛があるからこそ、自分のことや、自分の利益だけ求めるのではなく、耐え忍んで、生きていける。助け合い、慰め合い、励まし合い、祈り合い、希望をもって、よき未来を築いていける、そのような力を育み、成長を導くもの、それが愛なのです。もし、愛がなくなれば、生き甲斐や、成長は望めず、愛憎関係という言葉があります、愛は憎しみに転じ、喪失感のみならず、悩み、苦しみ、失望、孤独、そして怒りが募り、すべてが重荷に変わります。それどころか、ハラスメント、暴力や戦争によって相手の存在を否定し、相手を殺害するのも厭わない、そのような罪を平気で犯すのが、残念ながら、人間なのです。

愛は、永遠であり、全てであるという点において、人間に与えられた異言・予言・知識・お金という他の賜物に勝ると聖書はいうのです。異言・予言というのは、当時の宗教者に求められる能力であり、知識やお金というのは、現代のわれわれにも求められ、大切にされなければならぬものですが、部分的であり、有限であるという点において、やがて廃れ、また人間の欲望を刺激し、人間を高慢にするという点で、むしろ、愛の方が勝るといえるのです。

「愛の賛歌」は、以下のように愛を讃えます。すなわち、愛は忍耐強い、愛は情け深い、妬まない、愛は自慢せず、高ぶらない、礼を失せず、自分の利益を求めず、怒らず、悪をたくらまない。不正を喜ばず、真理をとくに喜ぶ。すべてを忍び、すべてを望み、すべてに耐える。こんなに素晴らしい徳性を備えたものは確かに愛だけです。お金や知識は必要ですが、人を高ぶらせ、人間の成長にはなかなかつながりませ

ん。妬み、自慢、高慢、非礼、自己利益、怒り、悪だくみ、不正、これらすべては、知識やお金の多寡から生まれてくるものです。しかし、私も人間ですから、自分をよく見てもらいたい、自分の業績を自慢したい、自分の利益をもっと求めたいという思いによくかられます。そんな時、私は、愛という文字を、イエス・キリストという言葉に置き換えて、この箇所を読むことにしています。すなわち、イエス・キリストは、忍耐強く、情け深く、妬まず、自慢せず、高ぶらず、礼を重んじ、自分の利益を求めず、怒らず、悪をたくらまず、不正を喜ばず、真理を共に喜び、すべてを忍び、すべてを望み、すべてに耐えるお方であった、と。

このようなイエス・キリストを信じることによって、齒を食いしばって我慢し、自分を押し出すことが、愛ではないということに気づかれます。そのような愛は、自己愛であって、抑制が効かなければ、人や組織を傷つけ、信頼を損なうものです。聖書には、「わたしたちが愛したものではありません。神が私たちを愛して、その子イエス・キリストをくださったのです。ここに愛があります」（一ヨハ四 一〇）と記されています。何よりも大切なのは、十字架につけられ、復活したイエス・キリストであり、人間の成長にとって大切な愛なのです。

皆さんは「この壺は満杯か」という話を知っているでしょうか。「ある大学でこんな授業があった」というくだりからその話は始まります。「クイズの時間だ」教授はそう言って、大きな壺を取り出して教壇に置いた。その壺に、彼は一つ一つ岩を詰めた。壺が一杯になるまで岩を詰めて、彼は学生に聞いた。「この壺は満杯か？」教室中の学生が「はい」と答えた。「本当に？」「素晴らしいながら、教授は教壇の下からバケツ一杯の砂利を取り出した。そして砂利を壺の中に流し込み、壺を振りながら、岩と岩の間を砂利で

埋めていく。そしてもう一度聞いた。「この壺は満杯か？」

学生は答えられない。一人の生徒が「たぶん違うだろう」と答えた。教授は「そうだ」と笑い、教壇の下から砂の入ったバケツを取り出した。それを岩と砂利の隙間に流し込んだ後、三度目の質問を投げかけた。「この壺は満杯になったか？」学生は声を揃えて、「いや」と答えた。教授は水差しを取り出し、壺の縁（ふち）までなみなみと水を注いだ。彼は学生に最後の質問を投げかける。「僕が何を言いたいのかわかるだろうか？」一人の学生が手を挙げた。「どんなにスケジュールが厳しい時でも、最大限の努力をすれば、いつでも予定を詰め込むことが可能だということです。」それは違うと教授は言った。重要なポイントはそのではないんだよ。この例が私たちに示してくれる真実は、大きな岩を先に入れない限り、それが入る余地は、その後二度とないということなんだ。

君たちの人生にとって大きな岩とは何だろう、と教授は話し始める。ここでいう「大きな岩」とは、君たちにとって一番大切なものだ。それを最初に壺に入れなさい。さもないと君たちはそれを永遠に失うことになる。もし君たちが小さな砂利、つまり、自分にとって重要性の低いものから満たしていけば、君たちの人生は重要でない「何か」に満たされるものになるだろう。そして大きな岩、つまり自分にとって一番大事なものに割く時間を失い、その結果、それ自体を失うだろう。

《祈り》

お祈りします。天の父なる神様。人間形成において、最初に入れるべき大切なものとは何でしょうか。大きな岩から順序良く入れていくことが重要であり、そうした方がより多く入る器になること

を、「この壺は満杯か」という話は伝えております。東北学院で過ごす時間が大切なものを入れる時間がありますよう。この祈りと願いイエス・キリストの御名を通じて、御前にささげます。
アーメン。

あなたの神である主はあなたのただ中におられ
救いをもたらす勇者である。

(ゼファニヤ書 3章17節)





愛はいっぱい

幼稚園 園長 島 内 久美子

ヨハネの手紙一 四章一六節

16 私^{わたし}たちは、神^{かみ}が私^{わたし}たちに抱^{いだ}いておられる愛^{あい}を知^しり、信^{しん}じています。
神^{かみ}は愛^{あい}です。愛^{あい}の内^{うち}にとどまる人^{ひと}は、神^{かみ}の内^{うち}にとどまり、神^{かみ}もその人^{ひと}の内^{うち}にとどまってくださいます。

(聖書協会共同訳)

「神さま、今日は○○ちゃんがお熱でお休みです。早くよくなって幼稚園で一緒に遊べますように：アーメン」毎日お部屋でお祈りをする皆さんのお祈りを聞いていると、皆さんの心に愛がいっぱいあるのを感じます。

四月の聖書のみことばは「神は愛です。」（ヨハネの手紙一 四：一六）ですね。神さまは愛なんです。他にも聖書には愛という言葉がたくさん書かれています。

では愛ってなんでしょう。（＊園児へ問いかけ）

「優しい気持ち」「泣いているお友だちに大丈夫って言ってあげること」「あーそーばー！って言われたらいいよっていうこと」「ごめんねって言われたら、いいよっていうこと」

そうです。それは愛ですね。みんなが優しい愛の気持ちでいる時、神さまと一緒にいるのだと思います。

では、愛ではないことはどんなことでしょう。（＊園児へ問いかけ）

「お友だちに意地悪すること」「けんかすること」「キックとかパンチとかすること」そうですね、これは愛ではありませんね。こんなことをしている時は、神さまから離れてしまっている時ですね。

神さまの愛はいっぱいあって、それは世界中にあふれています。目に見える愛もありますし、見えない愛もあります。空や海、おひさまや雨、おいしい食べ物、お友だちやお家の人は目に見えますね。楽しい気持ち、頑張る力、優しい気持ちなどは目には見えませんがこれも神さまの愛です。皆さんは愛を知っている子どもです。これからも神さまの愛をいっぱい探していきましょうね。

さて、たくさんある愛の中で一番大きな愛があります。それはイエス様です。年長さんはクリスマスに聖誕劇をしてイエス様のお誕生をお祝いしましたね。私たちにイエス様をくださったことが神さまの愛の

中で一番大きな愛なのです。これからも神さまの愛に感謝して、イエス様にお祈りをして、愛の子どもとして大きくなっていきましょう。

《お祈り》

天の優しい神さま、私たちにたくさんのお愛をくださってありがとうございます。

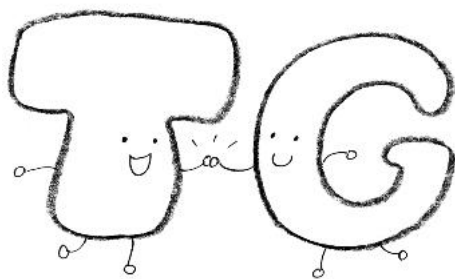
けれども時々神さまから離れて、愛のないところに行ってしまう時があります。ごめんなさい。

これからも神さまの愛の中で、神さまの子どもとしてお友だちとなかよく遊んでいけるようにいつもそばにいてお守りください。

このお祈りをイエス様のお名前をとおしておきください。 アーメン

私たちが愛するのは、神がまず私たちを
愛してくださったからです。

(ヨハネの手紙一 4章19節)





キリストの愛に押し出される歩み

東北学院中学校・高等学校 宗教主任 松井浩樹

マルコによる福音書 一〇章四六〜五二節

46 一行はエリコの町に着いた。イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出て行こうとされたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人が道端に座って物乞いをしていた。47 ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と言い始めた。48 多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。49 イエスは立ち止まって、「あの男を呼んで来なさい」と言われた。人々は盲人を呼んで言った。「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」50 盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。51 イエスは、「何をしてほしいのか」と言われた。盲人は、「先生、目が見えるようになりたいのです」と言った。52 そこで、イエスは言われた。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。

(新共同訳)

今で言うところの宿場町です。エリコという町に、バルティマイという目が不自由で、物乞いをしていた人が毎日、道端に座っていました。

聖書に記される奇跡物語をみますと、主イエスによって癒やされる人は、概ね匿名が多いのですが、この目が不自由な人には名前が記されています。しかも「ティマイの子で、バルティマイ」と、説明まで記されています。バルティマイの頭文字の「バル」というのは「子ども」という意味があるので、それで「バルティマイ」というわけです。なぜ、ここに説明付きの具体名が記されているかは、おそらく実在した人物であったことが考えられます。目が不自由で、かつて物乞いをしていた、けれどもキリストの愛によって新しい人生が開かれた「あのバルティマイだ」というような、当時の人々からはよく知られていた人物で、奇跡物語であったからこそ、そのまま名前が記されたことが考えられるのです。

そのバルティマイは、人々に叫ぶことを制されても、なお叫ぶのをやめず主イエスに、まさに人生最後の望みといわんばかりに、一心に叫び続けたのであります。「私を憐れんでください」。主イエスは、その叫び声に耳を止められて「あの男を呼んできなさい」と言われます。周りにいた人々はバルティマイに言います。「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ」。

いかがでしょうか。例えば名指しで、職員室へ呼ばれた時を思い起こしてください。何かしら呼ばれることへの心当たりがあるならばなおのこと、強めの指導があるのではないか、自分はもちろんのこと、周りまで心配をするでしょう。しかしその周りが「安心しなさい、立ちなさい。お呼びだ」という。あまり説得力がありません。自分のことではないから、そのような無責任なことを軽々しく言えるのであって、何の慰めにもならないのです。

しかし、キリストの愛を確信したバルティマイは大きな決断をする、いやその愛に応える決断をさせられる仕方で行動に出るのです。具体的には「上着を脱ぎ捨てた」とあります。この「上着」というのは、外套のような上から羽織って、体全体がすっぽり収まるものであります。寒さから身を守る物でもあったし、砂埃から身を守る、あるいは、物乞いをしていたというのですから道に広げて、その上に施しを受けるためにも使ってもいたでしょう。つまり単なる上着ですが、決して多くはないであろう貴重な財産の一つであつたし、これまでの生活に欠かせないものであつたことは確かでしょう。それを、脱ぎ捨てた。そしてさらに「躍り上がってイエスのところに来た」と続くのです。ここに、バルティマイの新しい人生への幕開けが始まるのです。

主イエスは、何をしてほしいのかとたずねました。目が見えるようになりたいと願うと主イエスは「では直してあげよう」といわれたではありません。一言「行きなさい」と答えるだけです。そこで自由に、一人で歩くことができるようになって「あなたの信仰があなたを救った」との宣言があつて、バルティマイの目が見えるようになったのです。目が見えるようになった結果として、「歩きなさい」ではありません。まず「行きなさい」と命じられて、そして目が癒されていくのです。つまり、この奇跡物語は目が見えるようになるということが目的ではなかったのです。結果として視力が回復したということを伝え、キリストの愛が二重にも三重にも覆い包まれ、匿名の人物ではなくバルティマイという、おそらく実在したであろう人物に起こつたリアリティがあふれる奇跡物語として伝えられているのです。

このキリストの愛に目を留める時、私たちはバルティマイのようにまず、自分の意思で今日もしっかりと歩んでいく、そういう決心におのずと駆り立てられるのです。決して状況が良くない時であっても、自

分の足でしっかりと立ち上がろうとするし、それができる勇気が与えられるのです。そこから、これまでの自分を奮い立たせる単なる決心とは違う、キリストの愛に支えられ、押し出される新しい豊かな歩みが始まるのであります。

《祈り》

主イエス・キリストの父なる神様。

新しい命のもと、礼拝の朝が与えられましたことを感謝いたします。

主なるあなたの愛の支えにより、今日の豊かな一日を恵みの内に始めさせてください。

主の御名によって祈ります。アーメン。



心の目

東北学院中学校・高等学校 聖書科教諭 成 智 圭

ヨハネによる福音書 九章一―一二節

1 さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。2 弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」3 イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。4 わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行かねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。5 わたしは、世にいる間、世の光である。」6 こう言ってから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。7 そして、「シロアム——『遣わされた者』という意味——の池に行って洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗い、目が見えるようになって、帰って来た。8 近所の人々や、彼が物乞いをしていたのを見ていた人々が、「これは、座って物乞いをしていた人ではないか」と言った。9 「その人だ」と言う者もいれば、「いや違う。似ているだけだ」と言う者もいた。本人は、「わたしがそうなのです」と言った。10 そこで人々が、「では、お前の目はどのようにして開いたのか」と言うと、

11 彼は答えた。「イエスという方が、土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに行つて洗いなさい』と言われしました。そこで、行つて洗つたら、見えるようになったのです。」12 人々が「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と言つた。

(新共同訳)

あなたは、誰ですか？あなたの特徴はなんですか？そう言われたら、皆さんはなんと答えるでしょうか。例えば、自分は学院生である、とか、自分は男子である、女子である、自分は〇〇小学校、〇〇中学校出身である、自分の名前はなんとかである、自分はこんなことができる、こういう経験がある、部活はこれでこういう功績を持っている、など、いろいろな答え方があると思います。

毎日持たれているこの礼拝の時間、それは、自分とは一体何者なのか、自分自身を見つめ直す時間でもあります。

今日の聖書の言葉に登場する、目の見えない人は、一体どんな人でしょうか。

その人についてかかれていることは少ないですが、いくつか挙げてみるとするならば、

・目が生まれつき見えてない。

・みんなから、汚れている、罪人だと思われる。

この二つが挙げられるのではないのでしょうか。

この人が、罪人と思われていた理由はなんでしょうか。実は、その時代、病氣になったり不幸なことが

あったりすると、その人が悪いことをしたからだ、その親が悪いことをしたからだ、という考え方が普通になっていたからでした。いわゆる、因果応報というものです。

みんなから罪人だと思われていたこの目の見えない人、きっと自分でも罪人だと思っていたと思います。あれだけみんなから、お前が悪いことをしたから目が見えないんだ、いやきっと親も悪い人なんだ、そう言われてしまったら、ああ、自分は悪いことをしたから、こうなったんだということが、それが自分も気づかないうちに頭に刷り込まれていたに違いありません。

みなさんも同じ経験ありませんか。友達に、お前は馬鹿だと言われたら、本当に自分が馬鹿だと感じることがあります。使えない、そう言われてしまったら、自分は使えない人間なんだ、と思ってしまいかもしれません。周りの人の言葉で、自分が作りあげられてしまうことが、わたしたちには度々あります。でも、イエスははっきり言うのです。

この人は、お前たちのそういう意見、そういう見方で作り上げられてしまっている。お前たちが罪人だ、悪人だ、そういうから、この人もそう思ってしまったている。

でもちがう。この人は、神様が大切に作られた、一人の人間なんだ。

そしてイエスはこの人の目を見えるようにしたと書いてあります。私は、きっとこの人の生物学的に、視力が回復した、目が見えるようになっただけではなくて、心の目も見えるようになったんじゃないかなと思います。

自分はいままで周りの人によって、罪人と決めつけられていただけなんだ。自分は、神様によって大切に作られた人間なんだ。そう思って、新しい歩みへと進むことができたのではないでしょうか。

学校生活、いろいろなことがあります。自分がどういう人間なのか、自分自身を、周りの人間や環境によって作られてしまうこともあるかもしれません。

でもそういうとき、今日の聖書の言葉を思い出してください。

何ができるかできないか関係ない。かわいいかかわいくないとか、使えるとか使えないとか関係ない。みんなからなんと言われようが、良いんです。みなさん一人ひとりは、友達、先生の作品である以前に、神様によって大切に作られた、そういう一人ひとりなのです。イエス・キリストは、そのような私たちに、日々、寄り添ってくださるお方です。



神の愛の中で自己を見出す

榴ヶ岡高等学校 宗教主任

西間木

順

マルコによる福音書 一章三二―三四節

32 夕方^{ゆうがた}になって日^ひが沈^{しず}むと、人々^{ひとびと}は、病人^{びょうにん}や悪霊^{あくれい}に取りつ^とかれた者^{もの}を皆^{みな}、イエスのもとに連^つれて来^きた。
33 町中^{まちじゅう}の^{ひと}人^{ひと}が、戸口^{とぐち}に集^{あつ}まった。 34 イエスは、いろいろな病氣^{びょうき}にかかっている大勢^{おおぜい}の人^{ひと}たちをいやし、
また、多くの悪霊^{あくれい}を追^おい出^だして、悪霊^{あくれい}にもの^いを言^いうこと^{こと}をお許^{ゆる}しにならなかつた。悪霊^{あくれい}はイエスを知^しっ
ていたからである。

(新共同訳)

紀元二七年ごろ、主イエスはガリラヤと呼ばれている地域で伝道活動を始められました。主イエスは何人々に伝えたのか。一五節に「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」と書かれてありました。この主イエスの言葉こそ、主イエスが人々に伝えたことなのです。

「悔い改め」をギリシア語では「メタノイア」といいます。メタノイアを右から読みますと、「アイノタメ」です。主イエスが教える悔い改めとは、神の愛を用いた生き方への方向転換なのです。主イエスは、「神はあなたを愛しておられる。だからこそ、神の言葉を謙虚に聞き、自分の心と対話し、神の愛を用いた生き方をしていこう」と呼びかけられたのです。主イエスは、ただ言葉で人々に伝えただけではありませんでした。主イエスは、神の愛を用いた生き方を実践されたのです。ですから、私たちは、主イエスを模範としていくのです。

さて、今日の箇所には、主イエスがいろいろな病氣にかかっている人たちをいやされたことが書かれています。今の時代、考えられないことですが、当時のユダヤ人たちは、病氣にかかることは、「病氣にかかった本人か、またはその親が、神に対して罪を犯した。だからその罰として病氣にかかったのだ。もう神から愛されていないのだ」と考えていたのです。病氣にかかった人たちは、「罪人」とか「汚れている」と言われていたのです。ある意味、その人の人格が否定され、人間らしい生き方ができなかつたと言えます。ですから病氣にかかることは、二つの苦しみをもっていたことになります。一つは、病氣の苦しみです。もう一つは、病氣のゆえに人間として見られず、人間らしい生活を送ることができない苦しみです。

そのような人たちを主イエスは愛されたのです。癒されたのです。主イエスは、病氣にかかった人たちに、「あなたも神から愛されているのですよ」と伝えたのです。主イエスは、その人たちが神から愛され

ている者として、言い換えれば聖書的な人格といえるでしょう、そのように扱われたのです。そして、これから神から愛されている者として生きるように期待されたのです。

主イエスは、人々を差別することなく、分け隔てすることなく、すべての人々に、神の愛を伝えました。そして、主イエスと出会った人々が、その神の愛の中で、自分を見出すことができるようにされたのです。そして神の愛の中で自分を見出した者が、今度は、神の愛を用いて他者とともによりよく生きるように主イエスは期待されたのです。

新約聖書の時代の約二〇〇〇年後を生きる私たちにも期待されていることなのです。「あなたは神から愛されているのだ。その神の愛の中で、自分を見出しなさい。そして、神から愛されている者として、神の愛を用いて他者とともによりよく生きなさい」と主イエスは私たちに教えておられるのです。

《祈り》

父なる神

新しい命を与えてくださり、この学校へと招いてくださり感謝いたします。

あなたの招きにこたえ、生徒教職員がこの場に集い、ともに礼拝をささげることができます恵みを感謝します。

どうぞ、私たちがあなたから愛されていることに気づくことができますように。そしてあなたの愛を用いて、他者とともによりよく生きることができますように。あなたの愛を用いて、他者に奉仕することができますように。

今、この場におりません友のために祈る心を与えてください。

すべてのことを当たり前だと思うのではなくて、どんなことにも感謝する心を与えてください。

この学校に連なる生徒教職員一人一人が、「今日もこの学校に来てよかった」と思える一日に、ともにしていくことができますように。

この祈り　尊いわれらの主　イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン



同情と共感

大学宗教授任 吉田 新

マルコによる福音書 六章三〇～三四節

³⁰使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した。
³¹イエスは、「さあ、あなたがただけで、寂しい所へ行き、しばらく休むがよい」と言われた。出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。³²そこで、一同は舟に乗って、自分たちだけで寂しい所へ行った。³³ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見て、それと気づき、方々の町から徒歩で駆けつけ、彼らより先にそこに着いた。³⁴イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼いない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。

(聖書協会共同訳)

本日の聖書箇所には「イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた」とあります。「飼い主のいない羊のような」という表現は、おそらく旧約聖書から影響を受けたもので、指導者のいない、右往左往し、困惑している状態のことを指していると思います。多くの人々が戸惑い、混迷を極めている状態を見て、イエスは「深く憐れんだ」とあります。

この「深く憐れむ」と訳されている部分ですが、原文のギリシア語は「スプランクニゾマイ」という言葉でもともと内蔵をさす名詞に由来しています。それゆえ、他の日本語訳聖書では「はらわたがちぎれる想いに駆られる」とか、「はらわたが突き動かされる」といったように訳されています。「憐れむ」という日本語の訳は、もともと中国語訳聖書からの影響を受けたものです。「憐れむ」はどちらかというと目上の人が目下の人を「憐れに思う」という意味内容かと思えます。「憐れむ人」と「憐れまれる人」という関係が前提になります。しかし、先ほど、申し上げたように、もともとの原文では、悲惨な状態にある人を見て、自分の内側から激しく揺さぶられ、まるで自分の苦しみのように感じるという意味をもっています。もっと正確に言えば、共に苦しむということでしょうか。

さて、先日、ある授業で「同情」と「共感」の違いについて参加者と共に考えました。「同情」は英語では「シンパシー (sympathy)」ですが、「共感」は英語で「エンパシー (empathy)」です。同情はかわいそう、気の毒に思う、という反応ですが、共感是他者の気持ちに思いをはせ、他者と同じように理解し、感じることです。共感することによって、他者の不遇な状況に対して抑えがたき感情が湧いて、その痛み、苦しみを何とか緩和しよう、助けてあげようという行動へと促されます。

皆さんの前に一枚の写真があるとします。そこには、大きな地震によってか、または戦争での空爆によって、完全に倒壊している家があります。その前に、五歳ぐらいの小さな女の子がたたずんでいます。女の子の服は汚れ、右手でくまのぬいぐるみをぎゅっと抱きしめています。女の子は壊れた家の方をじっと眺めています。

この写真をご覧になったさい、女の子は気の毒だな、かわいそうだなと思うことは同情にあたるでしょう。しかし、この女の子をまるで自分のように思い、女の子の気持ちに寄り添って考える。自宅がなくなっているところがあるか、彼女の両親は無事か、避難所には温かい食事があるかなど、女の子の悲しみ、怒り、苦しみを自分の感情のように抱くことは共感にあたると思います。

「共感力」という言葉を最近、よく聞きます。この力が十分に備わっているか否かで、自分の生き方にも変化が生まれるそうです。向社会性が高い子ども（共感力がある子ども）の方が幸福度が高いという研究結果が出ているそうです。たしかに、学校で、思いやりのあるクラスメートは誰からも好かれるし、また本人も幸福そうに見えます。逆に思いやりがあまり感じられない人は、当然ながら、皆からあまり好かれませんし、その人もいつもイライラしているように見えます。

私の娘はあるキリスト教主義の幼稚園に通っていますが、この幼稚園では、毎年、クリスマスが近づくとする作業を行います。幼稚園には、聖書の物語にならって、飼育員おけに寝かされている赤ん坊のイエスの人形が置かれています。子どもたちは、赤ちゃんのイエスのベッドをつくるためにわらをそこに敷くのですが、そのわらを敷くには一つの約束があります。それは、幼稚園で困っているお友達をお手伝いしたとき、お友達を助けたときに、イエスの人形のところに行き、イエスのベッドにひとつわらを敷くので

す。

私はこの習慣を娘から聞いたときに、個人的にとっても驚き、はっとしました。よいことをしたら、誰かに褒められます。しかし、褒められるためではなく、誰かの苦しみを思い、それを自分のことのように受け止めることをできたことを感謝し、その感謝の気持ちがいエスを迎える準備につながることを教えています。共感力は自然に身につくものでも、そして、自ずと高まるものではありません。私たちが常に意識、想像力は働かせないと身に着がなく、高まりません。

「LIFE LIGHT LOVE」をスクールモットーに掲げる東北学院は、愛を大切にする学校です。共感はずなわち愛とはいえませんが、愛の入り口は共感にあると思います。他者の苦しみを自分の苦しみと感じたイエスの姿になりたいと思います。



人の心と神の愛

大学宗教授任 川 島 堅 二

マルコによる福音書 四章一〜九節

1 イエスは、再び湖のほとりで教え始められた。すると、おびただしい群衆が御もとに集まって来たので、イエスは舟に乗って腰を下ろし、湖の上におられた。群衆は皆岸辺にいた。2 イエスはたとえを用いて多くのことを教えられ、その中で次のように言われた。3 「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出て行った。4 蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。5 ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐに芽を出した。6 しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。7 ほかの種は茨の中落ちた。すると、茨が伸びて塞いだので、実を結ばなかった。8 また、ほかの種は、良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍になった。」9 そして、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われた。

(聖書協会共同訳)

イエス・キリストは多くのたとえで教えをされたが、この「種まく人のたとえ」はもっとも有名なたとえ話だと思います。しかもマルコ福音書ではこのたとえ話が最初に置かれている。その意味は、これの後に続くイエスの教えをどのような心で受け止めるか、そのことを示すためにマルコはあえてこのたとえ話を最初に置いたのです。

「種」はイエスの教え、神のみ言葉です。その種がまかれる「土地」は人の心を表しています。「種」は常に変わらない。誰に対しても平等に同じ内容、同じ能力、同じ可能性を秘めています。ここに差別なき神の愛が示されています。今年の礼拝の共通テーマは東北学院大のスクールモットーである LIFE LIGHT LOVE の中の LOVE「愛」ということですので、このことをここで強調しておきたいと思います。人は相手によって態度を変えることがしばしばです。人の顔色を窺って言葉を変えたりします。しかし、神はそのようなことをなさらない。誰に対しても差別なく同じものを与えられる。それが神の愛です。しかしながら、その神の愛を受け取る人の心は様々であって、種を生かすも殺すも人の心次第であると、イエスは教えています。

まず「道端」に落ちた種です。道は人や車が通る場所であり、固く踏み固められています。それは種を受け入れるような可能性が全くない場所です。種はその可能性を全く発揮できないうちに鳥に食べられてしまう。日本のことわざにも「馬の耳に念仏」「豚に真珠」と言われるように、その価値がまったく理解されないまま捨て去られてしまうような状態です。

次に「石だらけで土の少ない土地」です。種は芽を出したものの石が邪魔をして根を張ることができないので、やがて枯れてしまいます。「あついいな」と思ってその時は少し心を動かされる。しかしすぐに

忘れてしまつて身につくことのない状態です。

次は「茨」の中に落ちた種。すでに茨が生えているので、それなりに肥えた土もあり、種は芽を出し根を張ることもできたけれども、先にはびこっている茨に邪魔をされて実を結ぶまでには至らない状態です。み言葉を聞いてある程度実践して身につきかけたけれども、他にもやりたいこと、したいことがたくさんあつてそれらに邪魔をされて結局は実を結ぶまでに至らない状態です。

そして最後に「良い土地」にまかれた種。種は芽を出し、根を張り、枝を伸ばし、花を咲かせ、三〇倍、六〇倍、百倍の実を結ぶに至る状態です。受けた教え、み言葉がその人のうちで血となり肉となり多くの良き実りを人生にもたらす状態のことです。

わたしは牧師として東京と神奈川、二つの教会で五年ずつ一〇年間教会伝道に携わりました。その後、働きの場をキリスト教主義の大学に移して約三〇年間、神の言葉、聖書を若い人々に伝える仕事をしてきました。その働きを私は常に種まきの仕事であると考えてきました。

同時に、幼少のころから教会学校に通い、青年期、壮年期を経て今日に至るまで、種をいただく側でもあつたと思います。その種をまかれる側の自分を振り返って、果たして自分はどういう心の状態でみ言葉の種を受け取ってきただろうかと反省いたします。おそらく半数は「道端」の状態だったのではないかと。礼拝で牧師先生の説教を聞く、しかし、礼拝を終えて帰宅したころにはもうお説教の内容が思い出せないことがしばしばある。み言葉は芽を出す前にサタンに奪い取られてしまったのです。「石だらけの土地」聞いたときはいいお話だとすこし心を動かされても、しばらくするとやはり忘れてしまふ。み言葉の種は全く根を張ることなく枯れてしまふ。そして「茨の中に落ちた種」です。ある程度、その教えがしば

らくは生活に根付き、実践してもやがて多忙に紛れて継続できないまま結局は失われてしまいます。そういうことも多々あった気がします。

しかし、他方、本当に数えるほどの少数ではあっても「良い土地」の状態で受け入れたみ言葉が確かにあった。今もそれが語られたときの牧師先生の声の響きが心にありありと思い浮かぶ、目の前に描き出された十字架につけられたイエス・キリストのお姿が見えてくるようなそういうみ言葉が確かにあった。人生の節目に与えられ、その後も繰り返し思い起こされるみ言葉、それを思い起こすことによって常に新たに慰めと励ましと生きる力を与えられるみ言葉が確かにあった。

ただそれにしてもこの「種まき」という仕方でのみ言葉の伝道はなんと効率の悪い方法なのかと思います。四分の三は実を結ぶことなく枯れてしまうのですから。

しかし、それは今日始まったことではなく、原始キリスト教会の時代からそうでした。使徒パウロはこれを「宣教の愚かさ」と言っています。(コリントの信徒への手紙一、一・一八―二二参照)

そして、これはまたイエス・キリストご自身が公生涯の初めに、サタンを試みに遭う中で決断された方法でもあったのです。

(マタイ福音書 四・一―一参照)

イエスは、サタンから「パンを与える」という仕方での働き、人々をあっと驚かすような奇跡を行って人を惹きつける方法、さらにはこの世の政治権力を握るという仕方での働きを提示されてそのすべてを拒否し、愚直に町々村々を自分の足で巡り歩いて教えを伝えるという仕方での宣教の道を選びました。

イエスに臨んだサタンの誘惑は今日の教会、伝道者に対してもあると思います。いわゆるカルトと呼ば

れる団体（統一教会）などに共通するのは正体を隠した勧誘です。宗教であることさえ隠して、文化団体、国際交流の団体、スポーツサークル、韓国料理のパーティなどを装って人々を誘い、そして十分に親しくなってもう後戻りはできないというような心理的結びつきをつくってから宗教であることを証していくという方法です。

これはみ言葉の代わりに「パン」を、魅力的な「奇跡」や、この世的な力、権力をイエスに提示したサタンの働きと同じ線上にあると思います。

しかし、私たちはそのような方法はとらずに、愚直にイエス・キリストの福音、十字架の福音をのべ伝える。これは一見効率が悪いように見えて、実は最善の方法なのです。なぜなら、四分の一、あるいはそれ以下の確率であったとしても良い土地にまかれた種は、三〇倍、六〇倍、百倍の実を結ぶことができる。一粒の種にはそれほど大きな力、可能性が秘められているからです。

野菜を食べて愛し合うのは
肥えた牛を食べて憎み合うことにまさる。

（箴言 15章17節）





無条件の愛・無償の愛

大学総合人文学科長 木村 純 二

ヨハネの手紙一 四章七～一一節

7 愛する人たち、互いに愛し合いましう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれた者であり、神を知っているからです。8 愛さない者は神を知りません。神は愛だからです。9 神は独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、私たちが生きるようになるためです。ここに、神の愛が私たちの内に現されました。10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めの献げ物として御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。11 愛する人たち、神がこのように私たちを愛されたのですから、私たちも互いに愛し合うべきです。

(聖書協会共同訳)

この『新約聖書』「第一ヨハネ」の四章は、キリスト教が大切にしている「愛」についての考え方をまとめて述べた箇所で、大変重要であり、かつ有名な箇所となっています。みなさんも一度は目にしたことがあるかと思いますが、あらためてキリスト教の考える「愛」とはどういうものか、順に確認していくことにしましょう。

今お読みした箇所では、「愛は神から出るもの」で、「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し」たのだと書かれています。これは、神の愛が、まず先に神さまを愛する態度を示したお利口さんにだけ向けられるのではなく、すべての人に向けて神さまのほうから発せられているということを意味します。これが、「無条件の愛」と言われる愛の在り方です。

人間の親子に例えて言うとも、もちろん親にとっては「我が子だ」という大前提の条件はあるのですが、その上で、親の言うことをよく聞くとか、成績がよくて自慢できるとかいった条件を満たしているから子どもを愛するわけではありません。逆に子どもの側が「お父さんお母さんは、私がお利口だから愛しているのだ」と思っているとしたら、健全な親子関係とは言えないでしょう。健全ではないというのは、「お利口にしていなければ、愛してもらえない」という不安を子どもが感じているからです。時に言うことを聞かず、反抗的な態度を取ることがあったとしても、子どもに寄り添い支えてゆくのが親の愛というものです。神さまは、すべての人間の創り主ですから、そうした無条件の愛をすべての人に注いでいるのです。ここまでは、「無条件」と言われるキリスト教の愛の性質について見て来しました。

次に考えたいのは、「神がこのように私たちを愛されたのですから、私たちも互いに愛し合うべきです」という部分です。神から無条件に注がれている愛を受け取った私たちは、当然まず神を愛するべきです。

しかし、神は自分に愛を返してもらおうと思って人間に愛を注いでいるわけではありません。もちろん、私たちが神に愛を返せば、神は喜んでくれるでしょうが、それ以上に、受け取った愛を他の人々に広げてほしいというのが神の願いなのです。

現実の人間関係の中で相手に愛を示そうとしたら、時間なりエネルギーなり、あるいはお金なり、自分の持っているものを相手に捧げることが必要になります。その際に、自分に何らかの利益が返ってくることを目的として相手に愛を注ぐのであれば、それは本当の愛ではないということです。自分に利益が返ってくることを狙って時間やエネルギーやお金を注ぐのは、「投資」です。投資なら、回収できる見込みのないものに労力をかけるのは、無駄なことでしょう。そうではなく、自分に利益が回収される見込みがないのに、自分の労力を相手に注ぐところに愛の意義があるわけです。これを「無償の愛」と呼んでいます。

ここで一つ、私の個人的な話をしましょう。私の妻は絵描きを職業にしており、近年は、東北学院の宗教センターで刊行している、この『説教集』の表紙の絵も描かせていただいております。また、自分で絵を描くだけでなく、子どものためのアートレッスンにも長年取り組んできました。昨年からは、幼稚園・保育園での教育にアートを取り入れるという東京都の教育プログラムに招聘され、園でのアートレッスンを担当しています。そのために、妻は三日から五日くらいの東京出張に月に二回・三回、出ています。多い時には、月の半分以上東京に行っていることもあります。

もともと、我が家には子どもが三人いたのですが、上の二人はすでに大学への進学でうちを出ており、一番下の中学三年生の息子が一緒に暮らしています。妻の出張中は、掃除・洗濯・買い物・料理など家事全般を私がやらなければなりません。息子は中三の受験生ですから、塾への送り迎えや勉強を見たりする

ことも必要で、正直なところ、大学での仕事と両立させるのはかなりしんどいことです。それでも「行ったらっしょい」と笑顔で妻を送り出すのは、もちろん妻に対する愛情がまず第一にあるわけですが、それだけではなく、妻のアートレッスンを楽しみに待っている子どもたちに対する愛があるからです。

とはいえ私は、その子たちに直接会ったことはありません。しかし、出張から帰った妻の報告で、子どもたちが目を輝かせてアートを体験している様子が目に浮かびます。例えば、筆をいくつか用意して、「これはブタさんの毛だよ。こっちはリスさんだよ」と言って、子どもたちの手のひらに赤・青・黄のどれか一つの絵の具を塗ります。子どもたちがブタさん・リスさんを思い浮かべながら、くすぐったさにクスクス笑う様子が浮かびます。そして、大きな紙にバンと手形を押していきます。次には、自分の手のひらに塗った色と違う色の子を見つけて握手します。そして今度は、混ざり合った色で手形を押します。こうなるともう子どもたちは、次から次へといろんな子と握手して、色づくりの探究を自発的に展開していきます。今まで特に親しかったわけでもない子とも握手を交わし、笑顔が広がっていきます。

自分がちよっとしんどいから、妻に出張を減らしてくれと頼んだら、その分だけ子どもたちからこうした豊かな経験をする機会が失われることになります。大学の仕事に加えて家事に多くの時間とエネルギーを注いでいるのですが、自分に利益があるかどうかを基準にしていたら、注いだ労力に見合うほど何らかの利益が回収できる見込みは到底ありません。だからやはりこれは、子どもたちへの愛によるものだと言うほかないでしょう。直接会ったことのない見ず知らずの相手でも、愛を向けることはできるのです。

そう思ったとき、逆に自分もこれまで気づかなかった多くの人の愛に支えられて生きて来たのだということに改めて気付かされます。直接お世話になった人たちへの感謝というものは当然あるのですが、背後

には、その人を支える人たちがいて初めて自分が世話を受けることができたのだということに、今まではちゃんと気づくことができなかったわけです。

みなさんも、例えば、部活動で熱心に指導して下さる顧問の先生やコーチにお世話になったことがあるかもしれません。でも、その裏では、顧問の先生やコーチの方をご家族の方が支えて送り出してくれるからこそ、自分たちの部活動が成り立っていたのかもしれないですね。あるいは、先生が若いころにお世話になった方がいて、その方への感謝の思いで、次世代のみなさんに熱心に指導してくれたのかもしれない。

社会は、そうした目に見えない誰かの愛によって支えられ、守られています。すべての人が回収の見込みのないことに労力を注ぐのをやめてしまったら、ギスギスして心から寛ぐことのできない社会になってしまうでしょう。

それでは、なぜ自分に利益が回収されるあてもないのに、誰かに時間や労力を注ぐことができるのかと言うと、当然それは、自分自身がそのような愛を受けた経験があるからです。自分は誰からの愛も受けたことはないけれど、自分から率先して愛の行いを始めたのだと主張する人はいないでしょう。誰もが、まず先にほかの誰かから愛を受け取って、それを次の人に広げて生きているのです。

そのことはつまり、一番初めの愛を担うことができるのは神さまだけということを意味しています。誰か特定の人間が最初に愛を始めたわけではありません。

みなさんも、自分には直接見えていない人も含めて、多くの人の愛を受け取って来ているはずです。それを受け取るだけでなく、広げる人になって下さい。愛を広げるうえで大切なのは、愛の一番の根源であ

る神の愛を知り、神からの愛を受け取ることです。それは、誰か特定の人だけ受け取ることを許された愛ではありません。すべての人が受け取ることのできる愛として、すでに示されています。

今日学んだ無条件の愛、無償の愛というものを受け取り、身近なところから広めていただきたいと思います。



愛のゆえに

大学宗教主任 田 島 卓

申命記 七章六～八節

6 あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は、地上にいるすべての民の中からあなたを選び、ご自分の宝の民とされた。7 あなたがたがどの民よりも数が多かったから、主があなたがたに心引かれて選んだのではない。むしろ、あなたがたは、どの民よりも少なかった。8 ただ、あなたがたに対する主の愛のゆえに、また、あなたがたの先祖に誓われた誓いを守るために、主は力強い手によってあなたがたを導き出し、奴隷の家、エジプトの王ファラオの手から、あなたを贖い出したのである。

(聖書協会共同訳)

私たちがまだ子供だった時代に、周りの大人たちにはどんな人がいたでしょうか。私の場合には、両親が共働きだったこともあって、保育園の送り迎えなどには、祖父のお世話になったことが多くありました。祖父が持っていた自動販売機というのがあったのですが、祖父がその商品の補充をするときに、なぜかいつも付いていた記憶があります。そういうときに、祖父は、だいたい商品の甘い飲み物をひとつくれたのでした。要するに、孫の視点から見ると、この祖父は孫に甘い人でした。

そんな祖父は私が三、四歳だったころには亡くなってしまったのですが、その後、親戚が何かの集まりのときには、とにかく厳格な人だったとか、祖父の葬儀のときには、同じ高校出身の元首相が弔問に訪れたとかという話を聞かされたので、おそらくそれなりに偉い人だったのだと思います。ところが、私の記憶にある祖父は、缶ジュースをくれたり、親に怒られたときに慰めてくれた存在に他なりませんでした。

さて、結局のところ、祖父がどういう人だったのかとか、人にはいろいろな側面がある、ということをお願いしたいわけでもありません。そうではなくて、私たちが誰かとの関係を持つとき、第三者の視点からは見えてこないものがあるということなのです。そして、私たちにとって愛とは、第三者の視点からの抽象的な言葉としてではなく、この私に向けられたものとして現れてくるのではないのでしょうか。

旧約聖書という書物は、あくまでも具体的な表現にこだわるところがあります。では、旧約聖書に登場する人々が、「愛」を感じるといえるのはどういう経験だったのでしょうか。

旧約聖書の場合、それが戦争での勝利という形で表明されることがあります。現代の感覚にはうまくそぐわないのですが、たとえば、難民という形でそれまで住んでいた国を追われ、定住する場所を探したのに、新しい土地の住民からひどい迫害を受けてしまったようなケースで考えてみましょう。そうした難民

の立場から見たとき、力無い自分たちに代わって、自分たちが住むことのできる場所を確保してくれる存在がいたならば、その行為を通してはじめて、自分たちが大切にされたという感覚を得ることができるよう。

今日お読みした申命記の箇所は、中立というような視点からではなく、弱くされている人々の視点から読むのであれば、とても納得し難い話です。注意していただきたいのは、ここで「あなた」と呼ばれているイスラエルの民は、申命記の物語の中では、まさに難民という立場であったということです。イスラエル人を奴隷としていたエジプトから脱出し、はるか昔に先祖が住んでいた土地を目指すも、その地に入ることができないまま荒野を放浪していた、難民状態であったイスラエル人に語られた言葉として、申命記は書かれています。実際、七節にはこうありました。「あなたがたがどの民よりも数が多かったから、主があなたがたに心引かれて選んだのではない。むしろ、あなたがたは、どの民よりも少なかった」。ここで呼び掛けられている民は、あくまで少数であり、力のない民であったことが強調されているのです。力なく、寄る辺ない難民でありながら、いや、だからこそ、特別に扱われたという出来事の記憶が鮮烈に残ります。神はまさにそのような仕方で我々に関わってくれたのだという証言として語られるときにこそ、抽象的な概念としての愛ではなく、具体的な形をとった愛とは何かが見えてきます。

申命記で語られることは、第三者の視点からみるなら、まったくもって公平性を欠く行いです。ですが、ここでの語り掛けは、あくまで二人称の語りなのです。自分たちは愛される資格に欠け、力無く、誰からも拒絶される難民でありながらも、神だけは全世界を敵に回すほどに自分たちを愛し、守ってくれたという、あまりにいきすぎなほどに強調された表現で語るのが、申命記の語り方なのです。

ひとつ、興味深い事実があります。申命記の中には「神」という言葉が三七四回出てきます。しかし、そのうち三二一回は「誰々の神」という形で、誰かとの関係において表現されます。しかもそのうち、もっとも使用回数が多いのは「あなたの神」という表現で、これが二三五回使われます。ここには、あなたのこれまでの人生の歩みのなかで、あなたと神しか知らない特別なエピソードのなかで、あなたに注がれたものを思い出しながら読め、という含意があるように思われます。力の無い私たちがここまで生き延びてこられたのは、決して私たちの力ではなかった、それは神の力が強かったからだというほかない、という証言の言葉なのです。

ですから、私たちは、申命記のこの言葉に聞くとときに、第三者としてではなく、二人称で呼び掛けられているものとして受け取ることがまず求められます。そして、自分を主人公と重ね合わせて読んだその物語を閉じたあとで、それでは、私の人生の中で神は私にどう関わってきたのかを振り返ることが求められてくるのです。

さらに、もうひとつ、注意が必要です。この物語で「イスラエル」という民が選ばれたのは、彼らが力のない難民だったからなのです。つまり、あくまでも神は、力のないものたち、小さきものたちの神としてこそ、その絶対的な力を顕すのであって、逆に、強大な力を持つものたちが神の名によって自分たちの力を行使するなら、それは決して神の力ではありえないのだということです。神がその力を顕しているのは、いったい誰においてなのか。神がそばに立っているのは、いったい誰なのか。私たちはこの問いを突きつけられつつ、しかし、自分のどうしようもない弱さのなかにおいてこそ、神の愛の大きさを見ることができるのです。



「人になれ」…東北学院という「愛」

大学宗教授任 藤野雄大

マタイによる福音書 二三章三四～四〇節

34 ファリサイ派^はの人々^{ひとびと}は、イエスがサドカイ派^はの人々^{ひとびと}を言^いい込^こめられたと聞^きいて、一^{いっ}緒^{しょ}に集^{あつ}まった。
35 そのうち^{ひとり}の一人^{ひとり}、律法^{りっぽう}の専門家^{せんもんか}が、イエスを試^{ため}そうとして尋^{たず}ねた。36 「先生^{せんせい}、律法^{りっぽう}の中^{なか}で、どの戒^いめ^めが最も重要^{もつとじゅうよう}でしょうか。」37 イエスは言^いわれた。「『心^{こころ}を尽^{つく}くし、魂^{たましい}を尽^{つく}くし、思^{おも}いを尽^{つく}くして、あなたの神^{かみ}である主^{しゅ}を愛^{あい}しなさい。』」38 これが最も重要^{もつとじゅうよう}な第一^{だいいち}の戒^いめである。39 第二^{だいに}も、これと同じ^{おな}ように重要^{じゅうよう}である。『隣人^{りんじん}を自分^{じぶん}のように愛^{あい}しなさい。』40 この二^{ふた}つの戒^いめに、律法^{りっぽう}全体^{ぜんたい}と預言者^{よげんしゃ}とが、かかっているのだ。」

(聖書協会共同訳)

かつてオードリー・ヘプバーンという女優がいました。「ローマの休日」や「ティファニーで朝食を」などの代表作で知られる、往年の大女優です。彼女は、晩年のある時、次のような言葉を語ったといわれています。「歳をとると、人は自分に二つの手があることに気が付きます。一つは、自分自身を助けるための手。そしてもう一つは、他人を助けるための手。」

とても印象的な言葉であると思います。この言葉が表しているのは、年齢を重ね、人生が成熟していく中で、人は、自分自身のことだけではなく、他者を思いやることができるようになる、ということだと思えます。確かに、自分自身の利益ばかりを追求し、他者を顧みない、自分中心の生き方というのは、非常に寂しいことであり、成熟した人生観とは言えないでしょう。他者を助けることを通して、自分自身の人生もまた、一層充実したものになる、ということができます。そして、このような考え方は、キリスト教的な教えと通じるところがあるのではないかとも思います。

与えられている聖書の言葉では、ファリサイ派の人々から主イエスが、律法の中で最も重要な掟はなんでしょうか、と尋ねられたことが記されています。これに対して、イエスは、二つの掟を示されました。一つ目の掟は、「心をつくし、精神をつくし、思いを尽くしてあなたの神である主を愛すること」(マタイ二二・三七節)であり、二つ目の掟は「隣人を自分のように愛すること」(同三九節)です。

この主イエスが示された二つの掟は、よく考えてみると、そこに三つの愛が含まれていることに気づきます。それは、第一に神への愛、第二に隣人への愛、そして第三に、自分自身への愛ということです。なぜならば、「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉は、まず自分自身を愛している、大切にすることができていることが前提になっているからです。

本学の三校祖の一人である押川方義先生は、この聖書箇所について、次のような言葉を遺しています。

すなわち、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、神を愛する」というのは、文字通り全身全霊で一貫して神を愛することであり、一方、隣人を自分のように愛するためには、まず自分自身を「正しく愛する術」を知らなければいけない。自分を間違つて愛するものは、真に他人を愛することはできないからであると（内田又一郎編、『押川先生聖書講義』、内外出版、一九三二年、二九六頁以下）。

それでは自分を正しく愛する術とは、一体どのようなことを意味しているのでしょうか。どのように自分を愛することが正しい愛し方なのでしょうか。これについては、押川先生は、「自愛の最も深き意は、己を霊の人になすことなり。」と語り、また「『己』を愛すとは、己が霊の人となることなり。『己の如く隣（隣人）を愛す。』とは、人を導きて霊の人とならしむることなり」（『聖書講義』三〇二―三〇三頁）とも語っています。

分かりやすい言葉で言えば、自分を正しく愛するというのは、自分自身の霊的、精神的な成長を目指すことだと理解できます。つまり人間的、人格的成熟を目指す生き方ということもできるでしょう。そして、隣人を正しく愛するというのもまた、押川先生の解釈に従えば、人を教え、導いて、「霊の人とならしむること」、つまり精神的、人格的成長を促すということになります。

この言葉から分かることは押川先生が、人生において何よりも大切なのは、世間の人がしばしば考えるような富や名声を得ること、高収入の仕事に就くことや、人生で成功を収めることではなくて、人格的成長、つまり成熟した人間になることだと考えていたということです。どれほど社会的な栄誉や成功を得たとしても、人格的に未熟なままであれば、その人生はどれほど虚しいことでしょうか。

そのため自分自身の研鑽を怠らないことが、本当の意味で自分自身を愛することであり、また周りの人

にも、そのように促していくことが、本当の意味での隣人愛であるということです。ここには、教育者としての押川先生の姿勢が表れていると思います。押川先生は、教育をキリスト教的隣人愛の実践として捉えていたと理解することもできるのでしょう。

そして、そのように考えることができるならば、実は、皆さんが現在、学んでおられる、この東北学院そのものが、押川先生、そしてホーイ先生、シュネーダー先生も含めた三校祖をはじめ、これまで東北学院を支えて来られたすべての方々の「愛」によって建てられた学校であると考えられるかと思えます。東北の地に住む青年を愛するが故に、押川先生らは、本学を設立しました。そして、ただ学問を伝えるだけでなく、同時に学生の人格的成長を願っていたのです。

このことを示すものとして、押川先生が亡くなられた際に、その教えを直接受けた、ある卒業生が記した短い追悼文を紹介したいと思います（城生安治「人になれ」『東北学院時報』第七五号一九二八年三月一日発行）。その追悼文には、卒業して三〇年経った現在でも、学生時代に押川先生から言われた「人になれ」という教えが耳に残っていると記されています。

印象的な言葉です。答えは一つではなく、それぞれが、この言葉を受け止め、生涯をかけて問い続けていくべき言葉です。この言葉は、豊かな人間性、成熟した人格を備えること、人としてあるべき生き方を指し示していると言えます。そして押川先生のキリスト教的愛が溢れた言葉でもあります。

本学に現在集っている私たちもまた、広い意味で言えば押川先生の教え子と言えます。人を愛し、自身もまた成熟した「人になれる」ように研鑽を積む。簡単なことではありませんが、そのような生き方を心がけたいと願います。



見守る愛

大学宗教授任 渡 邊 有 美

マタイによる福音書 二二章二八～三二節

28「ところで、あなたがたはどう思うか。ある人に息子が二人いたが、彼は兄のところへ行き、『子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい』と言った。29兄は『いやです』と答えたが、後で考え直して出かけた。30弟のところへも行つて、同じことを言うと、弟は『はい、お父さん』と答えたが、出かけなかった。31この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか。』彼らが「兄のほうです」と言うと、イエスは言われた。「よく言っておく。徴税人や娼婦たちのほうが、あなたがたより先に神の国に入る。32なぜなら、ヨハネが来て、義の道を示したのに、あなたがたは彼を信じず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。あなたがたはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった。」

(聖書協会共同訳)

皆さんは、『聖書』の物語には全て神様（父なる神）や御子なる神イエス・キリスト、或いは、聖霊が登場すると思っていますか。実は「神」という単語が登場しない物語もたくさんあります。イエス・キリストは、多くのたとえ話を語りましたが、この物語もそのうちの一つです。

二人の兄弟とお父さんがここでは登場しますが、中でも、お兄さんに焦点が当てられています。よくある親との関係の会話が繰り広げられています。このような会話を皆さんもしたことがあるのではないのでしょうか。父親に「働いてきなさい」と言われ、長男は自分の感情に素直に「仕事に行きたくない」と答えましたが、弟は反対に、表面上は要領よく、「行きます」と答えました。ぶどう園との言及があるので、恐らく、家族経営の園だったのでしょう。概して、長男・長女というのは世の中で生きていく上であり要領は良くありません。対して、弟や妹というのは、上を見ているので、どのように振る舞ったら親との関係が上手くいくかを知っていて立ち回ることが多いように思われます。しかし、不器用な分だけ、長男・長女というのは真面目であり、責任感があることも多いので、気持ちや感情を差し置いて、考えた挙句、自分の感情とは裏腹にやるべきことを実行することが多いのも確かでしょう。ここでのお兄さんはまさにそのケースで、「いやです」と答えたものの、考えを変えて仕事に出かけたとあります。責任感が勝ったものと思われれます。しかし弟は、「はい」と答えたものの、仕事には行きませんでした。結局、父親の命令に従ったのはお兄さんということになりました。

兄弟を取り扱ったたとえ話は他にも有名なお話として、「放蕩息子」の物語が『聖書』には挙げられています。レンブラントが描いた《放蕩息子の帰還》（一六六九年、エルミタージュ美術館所蔵）の作品は、オランダ出身のカトリックの司祭であるヘンリ・ナウエンを非常に感動させ、同名の一冊の本

（一九九一）を執筆したほどでした。兄弟の物語としては、こちらの方がより有名で、ステンド・グラスの主題としても取り上げられました（例…シャルトル大聖堂袖廊部分、一二〇五—一二一五年制作、一九二三、一九八〇年代修復）。この物語（「ルカによる福音書」一五章一一—三三節）では、弟に焦点が当てられています。弟は、父親が死去する前に遺産をねだり、財産を相続した後、自由奔放に生き、お金を使い尽くしてしまいます。その後、飢餓がその地方を襲い、食べるものに困った結果、豚の餌でもいいから食べたいと思うようになり、悔悛して父親の家に戻る決心をします。しかし息子として戻ることは相応しくないと感じ、召使として雇ってもらおうと考えます。実家では、召使も十分な食べ物が与えられていたことを思い出したからです。家の近くまで来た時、息子が帰って来ないかと待ち侘びていた父親は、はるか遠くから彼を見つけ、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻したとあります。この間、お兄さんは最初の物語と同じように、日々真面目に働いて暮らしていました。弟が不在になった結果、恐らく仕事量も二倍になり、何度も弟を恨んだのではないのでしょうか。或いは、仲が良かったとしたならば、弟を恋しく思っていたかも知れません。しかし、お兄さんが仕事から疲れて帰ってきた時に耳にしたのは宴会の音でした。それゆえ、何事かと僕の一人に聞くと、「弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです」（「ルカ」一五・二七）と言われました。この時のお兄さんの気持ちはどのようなものだったのでしょうか。『聖書』では、お兄さんは怒って家に入ろうとしなかったとあります。真面目に働いていたお兄さんは、宴会も催してもらったことがなかったためです。そこでお父さんが宥め、父親の所有しているものは全て兄のものであり、無傷で帰ってきた弟の帰還を喜ぶのは当然だと伝えます。皆さんがお兄さんだったらどのように感じるでしょうか。または弟だったらど

のように感じるでしょうか。

ナウエンは彼の著書で、私たちは全て、兄、弟のいずれかにもなり得ると書いています。つまり私たちは様々な部分を持ち合わせているのです。この物語にも「神」は登場しませんが、ここでは父親が、「神」を具現化していると考えることができます。最初の物語より父としての存在感は大きく、なぜ、生きている間に弟に財産分与することを許したのかは不明ですが、寛容でいつでも受け入れてくれる父親の姿は、私たちに父なる神の存在を思い起こさせます。ともするとこの二つの物語の兄弟は同一人物であった可能性もあります。しかし共通するのは、常にそこにいて、見守ってくださっている神の存在ではないでしょうか。私たちが何をして、何を望み、間違った選択をしても、私たちが立ち返るならば両手を広げて駆け寄り、接吻してくださる神。それが『聖書』の神なのです。その神は、私たちのために、御子イエスキリストを遣わしてくださいました。神に立ち返りましょう。



愛を体験する！

大学宗教授任 椎名 雄一郎

ヨハネの手紙一 四章七、一六節

7 愛する人たち、互いに愛し合いましよう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれた者であり、神を知っているからです。8 愛さない者は神を知りません。神は愛だからです。9 神は独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、私たちが生きるようになるためです。ここに、神の愛が私たちの内に現されました。10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めの献げ物として御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。11 愛する人たち、神がこのように私たちを愛されたのですから、私たちも互いに愛し合うべきです。12 いまだかつて神を見た者はいません。私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちの内にとどまり、神の愛が私たちの内に全うされているのです。13 神は私たちにご自分の霊を分け与えてくださいました。これによって、私たちが神の内にとどまり、神が私たちの内にとどまってくださることが分かります。14 私たちはまた、御子が御子を世の救い主として遣わされたことを見、またそのことを証しています。15 誰でも、イエスを神

の子と告白すれば、その人の内に神はとどまってくださり、その人も神の内にとどまります。¹⁶ 私たちは、神が私たちに抱いておられる愛を知り、信じています。神は愛です。愛の内にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。

(聖書協会共同訳)

皆さんは、「愛」と聞くと、どのような情景を思い浮かべますか。私は「愛」と聞くと、大学時代に交わしたある会話が思い出されます。大学時代、サークルには一組の仲の良い同級生のカップルがいました。仲が良いというか熱愛中といったほうが適切かもしれません。いつ、どこで会っても二人一緒でした。

そんな二人を見ていた私の先輩が、私に漏らした言葉が、私の記憶に今でも残っています。先輩は以下のように言うのです。

「なんて無駄な時間を過ごしているのだろうか。あの時間があつたら勉強したり、バイトをしたり、もっと有効な時間の使い方ができるのに！」

先輩の意見は合理的ですが、私は彼らの時間の使い方が本当に「無駄」なのかと考えてしまいました。むしろ、その時間は、彼らなりの大切な意味があったのではないかと考えられるからです。しかし先輩にとっては、二人が愛を育んでいる時間は「無駄」に見え、その時間をもっと有効に使えばよいのということでした。ちなみにその先輩は、恋愛にはわき目もふらず、勉強に、サークルに熱心な方でした。

皆さんはどのように考えますか。「愛」は目に見えないものです。私たちが抱いている「愛」は人それ

どれ異なるものかもしれません。目に見えないという意味では、「神」の存在を信じることと同じかもしれません。キリスト教は「愛の宗教」ともいわれています。が、「愛」とはどのようなものなのでしょうか。また「愛」は、体験しなくてはわからないものなのでしょうか、それとも実際に体験しなくても、頭で理解できるものなのでしょうか。

これまで、キリスト教の授業で勉強したことがあると思いますが、「愛」は大きく分けると三つの種類があります。冒頭に例として挙げたカップルの「愛」は恋愛ですから、「エロス」と呼ばれます。また「フィリア」と呼ばれる「愛」があります。こちらは「友愛」と呼ばれるもので、友達同士の友情ともいうことができるでしょう。そしてもう一つが「アガペー」の愛です。「アガペー」の愛は無償の愛とも呼ばれます。「エロス」、「フィリア」の愛は見返りを求める愛です。例えば恋人同士では、お互いに誕生日を祝わないと、気まずくなるでしょうし、友達同士もギブアンドテイクの部分があるのは、皆さん同じでしょう。

一方「アガペー」の愛は、見返りを求めません。わかりやすい例は親子の愛です。皆さんは生まれてから、これまで親にたくさん面倒を見てもらって、育ってきたと思います。特に小さいころは、自身では何もできず、すべて親が細心の注意を払って、見てくれていたのではないのでしょうか。さて、その皆さんの親は、老後を皆さんに世話してもらおうと思って、小さかったころの皆さんの面倒を見ていたわけではないでしょう。この「愛」がアガペーの愛です。何の見返りも求めず、ただ愛することです。そしてこの「愛」が「神の愛」なのです。

さて本日ヨハネの手紙一の四章十節に「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たち

の罪のために、宥めの献げ物として御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。つまり私たちが愛そうと思って神を愛したのではなく、まず神の愛が私たちに示されているということです。そしてこの「愛」に気付くかどうか、私たちが「愛」をもって生きていくことができるかどうか、重要なことであると考えられます。神様は私たちを愛しているので、「私たちの罪」のために、御子をお遣わしになったのです。とすれば、「私たちの罪」の自覚がなければ、私たちは神様の「愛」を受け取ると実感することができないとも考えられます。

皆さんは「罪」をもって生きていますか。ここでいう「罪」とは本来「的外れ」という意味で、「神様の方向を向かずに離れてしまっている」ということです。しかしどのような時に私たちは「罪」を認識するでしょうか。私たちはプライドもあり、「罪を犯しました」とはなかなか言うことができません。そして他者や事柄にその理由を転嫁したりして、自身の罪を認めたくないのです。さらに他者にそのことを問い詰められると、とかく言い訳をして自己正当化してしまいます。しかしその時の私たちの心の中には、どこかモヤモヤとしたものが残っているはずです。そしてこのモヤモヤしたものを「罪」と認識した時に、初めて罪から解放され、「愛」を感じることもできるのです。神様は常に私たちに「愛」を向けてくださっています。私たちが犯した「罪」を認識し、そのような罪深い私たちに対しても、神様が愛してくださっていると知るとき、私たちは「愛」を身をもって知ることとなります。

ここでもう一度、皆さんに問いかけます。「愛」は体験しないとわかりませんか？

「愛」は頭で理解することができても、実際に愛されたことを体感しないと「愛」を知ることはいけません。つまり私たちが弱く、罪を犯してしまうものであることをまず認めることがその第一歩です。

この弱さを認めたとき、その弱く何も自身の力ではなしえない私たちを、神様は愛してくださっていることを、感じることが出来ます。しかし自分の弱さを認めることは大変難しいことです。中世以来、カトリック教会の修道会の中には托鉢修道会と言われる修道会があります。これは日々、街中に立って人々からお金、食べ物恵んでもらいます。これはこの托鉢を通して修道士が、如何に弱いものであり、神様から生かされていることを体感するためだったそうです。

私たちも、ぜひ一度立ち止まって、自分自身を振り返り、神様の「愛」を受け入れたいと思います。

《祈り》

お祈りします。天の父なる神様、私たちはとかく自分自身の罪を認めず、責任を転嫁したり、様々な言い訳を言ってしまういます。しかし私たちはすでにあなたの「愛」を受け取っています。そのことに一人ひとりが気づいて、あなたからの「愛」を素直に受け入れることができますように。またあなたから受けた「愛」を通して、私たちが互いに愛し合うことができますように。この感謝と願い、主イエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン



あなたがたは、
真理に従うことによって、魂を清め、
偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、
清い心で深く愛し合いなさい。

(ペトロの手紙一 1章22節)



東北学院で学ぶ者として

大学宗敎主任 大門 耕平

ペトロの手紙一 一章一―二節

Ⅰ イエス・キリストの使徒^{しと}ペトロから、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地^{かくち}に離散^{りさん}し、滞在^{たいざい}している選^{えら}ばれた人^{ひと}たち、²すなわち、父^{ちち}なる神^{かみ}が予知^{よち}されたこと^{こと}に従^{したが}って、靈^{れい}により聖^{せい}なる者^{もの}とされ、イエス・キリストに従^{したが}い、また、その血^ちの注^{そと}ぎを受^うけるために選^{えら}ばれた人^{ひと}たちへ。恵^{めぐ}みと平和^{へいわ}が、あなたがたに豊^{ゆた}かに与^{あた}えられますように。

(聖書協会共同訳)

皆さんが礼拝を守っているこのラーハウザー記念東北学院大学礼拝堂は、一九三二年に名前にもなっているアメリカのエラ・ラーハウザー氏による当時の五万ドルの寄付により建築が実現されました。一九三二年頃の日本では、西洋建築が多くつくられておりましたが、西洋建築に決して欠かすことができないけれども、当時の日本には製造することが困難であったものがありました。それは、ドアノブです。日本は伝統的に引き戸でありましたので、西洋建築で使う品質の高いドアノブは、日本では製造が困難であり、アメリカからの輸入品が使われていました。当時のアメリカ製のドアノブは、非常に高価なものであり、建築予算が多額である建物でしか利用できない状態でありました。昭和七年以降、国会議事堂の建設に伴い、国産化の流れが生まれ、アメリカ産のドアノブの利用は限られるようになっていきます。また、ドアノブは、セキュリティを守る必要がありますので、残念ながら、現在まで当時のドアノブが残されている建物は限られているという状況です。私は、この時代のドアノブを探すのが好きで、いろいろな建物を見に行くのですが、ドアノブがそのまま残されている建物はそう多くはありません。

では、このラーハウザー記念礼拝堂はどうであるかというと、この建物には、SCHLAGEというドイツ系のアメリカ企業のドアノブが多く使われています。SCHLAGEのドアノブは、そのほかのドアノブと比べると利用された建物の数は少なく、大変貴重なものであります。そして、この礼拝堂には、今もそのドアノブが残されており、施錠の機能も十分な状態で残されています。この礼拝堂が大切にされてきたことを知ることができます。

東北学院大学は、キリスト教を基礎として、人間教育を行う大学であり、この礼拝堂は、その歴史の中で、祈る場所として、神と向き合い、大学の進むべき道や学生が学ぶ意義、生きる意義を考え、揺るがな

い思い、社会への貢献などを確認する礼拝が長く続けられてきております。

さて、みなさんは、大学での時間をどのような時間だと考えておられるでしょうか。中学校、高等学校を経て、大学生となった今、大学という時間をどのように特別なものと感じているでしょうか。大学生として、どのようなことにチャレンジしたいと思っているでしょうか。

私が大学生であった一九九六年頃は、バックパッカーとして海外に放浪することが流行になっていました。決められたツアーではなく、また、スタディツアーのように目的を持ったものでもなく、何も決めない、往復の航空券だけをもって、海外を放浪する学生が多くなりました。私自身も、学生時代に往復チケットだけをもって、いろいろな場所に行く機会を持ちました。その中で、先ほど、お読みした聖書に出てきたトルコにあるカッパドキアにも行ったことがあります。

カッパドキアという地は、ヨーロッパとアジアの間であるトルコにある都市であり、かつてはローマ帝国が支配する場所としてキリスト教が広がった地域であり、その後、イスラム教が広がったという歴史を持つ都市であります。そこに住んだキリスト教の人々は、ローマ帝国からの攻撃を受けること、また、ローマ帝国の東に位置するため、常にさらに東にある国からの侵略を受けやすい地域であり、それらから身を守ることを目的として、それまでにもあった地下都市を拡大させた場所です。学生時代に訪れたとき、入口はかがまないと入れないものでしたが、中に入ると今も当時の地下都市が残されており、それは、地下八階、深さ六五メートルにも及ぶ場所もあるくらい大きく、中には、生活に必要なもの、食堂や寝室、トイレ、などの跡が残されておりました。また、生活に必要なものだけではなく、礼拝堂も地下に作られており、多くの壁画が残されておりました。

必要なものだけを作るのではなく、礼拝堂や壁画が残されていることは、生きるうえで、祈る場所があること、よりどころとなる場所を共有することがいかに重要であるかを知らせるものであります。また、残念ながら、壁画の多くは、その後の他宗教による支配の結果、そのほとんどが破壊されたり、傷つけられたりしていました。このことは、礼拝堂や壁画を壊すことで人々のよりどころを無くすことが支配の面では重要なことであつたことがわかります。礼拝堂や壁画、祈る場所がいかに大切であるかをさらに伝えるものであります。

本日の聖書の箇所、ペトロの第一の手紙は、広く教会で読まれることを想定した文書です。宛先として、現在のトルコのあたりである「ポントス、ガラテヤ、カッパドキア、アジア、ビティニア」の地域名が記されています。この手紙は、六節に「今しばらくの間、さまざまな試練に悩まなければならないかもしれません」との記述があるように、迫害にあっているキリスト教を信じる人々を想定していることがわかります。紀元後九〇年代のローマ皇帝ドミティアヌスカ、あるいは、二世紀初頭のキリスト教徒に対する迫害期に書かれたものと言われています。

この手紙の一つの主題は、周囲の人々から迫害を受けているキリスト教の人々を励まし、神と向き合い続けることの勧めです。そして、厳しい時代状況の中であっても、変わらず、神を信頼し、自分たちのあるべき姿、進むべき道を確認することの重要性が強調されています。苦しみの中にある人たちに向けて、「恵みと平和が、あなた方に豊かに与えられますように」という、神に向き合うことを強調する言葉があります。

今皆さんは、大学生という時間の中で、自由に、自分自身の関心に基づいて、さまざまなことに活動の

幅を広げられていることだと思いますし、学びにおいても多くのことを吸収する時間を過ごされていると思います。そして、その中で、ぜひ、時代や社会が変容しても決して変わらない価値観を見つけてもらいたいと思っています。

ただし、資本主義が拡大する今は、そのような軸を見つけにくい時代かもしれません。高度に社会が発展し、資本主義が大きな影響を持つ今、人生の価値観において、利益があること、儲かること、効率的であることが、正しさのように共有されているように感じます。

自分自身がどのようなことをするのか、自分の在り方を問う、無条件的道徳原理ではなく、結果がどのようなのか、利益が得られれば何をするかは問題にはならないという帰結主義的道徳原理が多くを占めているように感じます。

ただし、近年は、SDGsに代表されるように、利益を追求することだけを目的とするのではなく、社会に貢献すること、環境を維持すること、人を支えることが、企業であっても持つべきものであることが共有されてくるようになりました。

このような社会に貢献すること、人を支えること、これを重視することは、皆さんが学ぶこの東北学院においては、創立の時から理念として共有されてきているものであります。三三という言葉で表現される、LIFE LIGHT LOVEです。これには、個人の尊厳を互いに大切にすること、学問や科学の成果によって新しい時代を切り開くこと、隣人愛をもつて地域や世界に仕えること、という視点がこめられています。時代が東北学院に追い付いてきたといってもよいのかもしれませんが。

このラーハウザー礼拝堂は、一九三二年につくられ、九二年の歴史があり、そして、その多くが当時の

まま残されている建物であります。ただし、その建物は、単に残されているのではなく、毎朝、このように礼拝の時間が続けられてきた場所であります。いろいろなことを学び、多くのことを経験する中、自らを大きくとらえるという誘惑に襲われたとしても、東北学院の先達たちは、この礼拝堂で、神と向き合い、自分自身の在り方、どのように生きるべきか、いかに社会に貢献する人物になるかを模索してきたのです。東北学院は、このような社会と結びついた教育を一三八年間続けてきている大学であることを再認識していただきたいと思います。三上に込められた個人の尊厳を互いに大切にすること、学問や科学の成果によって新しい時代を切り開くこと、隣人愛をもって地域や世界に仕えること、という視点と向き合う学びの時間を過ごしてください。

大学での学びをする今、そして、今の社会を生きる者として、そして、未来の世界の構築する役割を担うものとして、多くの学び、そして、社会との交わりをする今、ぜひ東北学院の三上の精神、そして、聖書が伝える神と向き合う視点を持ち、人のために学び、世界のために働ける力を身に付ける学びの日々を続けていただきたいと思います。

ともに、学びを続けていきましょう。



愛によって変えられた心―ザアカイの再出発―

大学宗教主任 渡 邊 蘭 子

ルカによる福音書 一九章一―一〇節

1 イエスはエリコに入り、町を通っておられた。2 そこに、ザアカイと言う人がいた。この人は徴税人の頭で、金持ちであった。3 イエスがどんな人か見ようとしたが、背が低かったので、群衆に遮られて見ることができなかった。4 それで、イエスを見るために、走って先回りし、いちじく桑の木に登った。そこを通り過ぎようとしておられたからである。5 イエスはその場所に来ると、上を見上げて言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、あなたの家に泊まることにしている。」6 ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。7 これを見た人たちは皆つぶやいた。「あの人は罪深い男のところに行って宿をとった。」8 しかし、ザアカイは立ち上がって、主に言った。「主よ、私は財産の半分を貧しい人々に施します。また、誰からでも、だまし取った物は、それを四倍にして返します。」9 イエスは彼に言われた。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。10 人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」

(聖書協会共同訳)

今日はザアカイの物語についてお話したいと思います。この物語には、罪に陥っていた人間がイエスの愛によってどのように心を変えられていったのか、ということが書かれています。

まず、ザアカイとはどのような人だったのでしょうか。ザアカイはエリコというところに住む徴税人の頭であり、大変裕福な人でした。「徴税人」というのは、ユダヤ人でありながら、同じ民族であるユダヤ人から税金を徴収するという仕事を担った人のことです。そして多くの場合、自分の利益のために、上乗せして税金を徴収していました。人々から税金を多めに取り立てて、私腹を肥やしていたのです。ですから、徴税人は同じ民族であるユダヤ人全体から嫌われ、罪深い者とみなされていました。ザアカイも例外ではなく、彼も不正な方法で富を築き、人々から嫌われていました。

そんなザアカイはイエスがエリコを通るといふ噂を聞き、一目見たいと思いました。当時、人々は、イエスというすごい力を持った人がいると噂していたので、ザアカイもイエスに興味を持っていたのです。しかし、背が低かったため群衆の中では見えませんでした。そこで彼は先回りして、いちじく桑の木に登りました。彼はかなりイエスに関心があったことがわかります。そして、イエスがその場所に來た時、イエスはザアカイを見上げて言いました。「ザアカイ、急いで降りてきなさい。今日は、あなたの家に泊まることにしている。」イエスはザアカイの名前を呼び、彼の家に行って泊まりたいと言ったのです。人々から嫌われ、孤独に生きていたザアカイはきつとびっくりしたでしょう。イエスはザアカイの罪深さを知りながらも、彼を受け入れ、親しく語りかけたのです。自分のように嫌われている者の家に、あのイエスが泊まりにきてくれるなんて、と思ったことでしょう。そうしてザアカイは急いで木から降り、喜んでイエスを自分の家に迎えました。

この出来事に対して、人々は不満を抱きました。七節にあるように、人々はイエスが「罪深い男のところに行って宿をとった」と言つて非難しました。イエスは罪深いザアカイのことを叱責するどころか、彼の家に泊まったのです。人々は訳の分からない展開にびっくりしたでしょう。「イエスはなんであんな奴のところ泊まるのか！あの男は不正によつて富を築いた。そんなやつに泊まって食事を振舞われるなんて、イエスはいったい何のつもりなのか」と人々は考えたことでしょう。

しかし、イエスはそうした人々の批判を恐れず、ザアカイに愛を示しました。イエスはザアカイの家に泊まり、そこでザアカイと親しく語りあつたことでしょう。ザアカイは罪を犯し、人々から嫌われ、孤独に生きる中で心がすさんでいましたが、イエスはそんな自分を赦し、受け入れ、愛してくれたのです。そうしてザアカイの心は変えられていきます。ザアカイはイエスにこう告白しました。「主よ、私は財産の半分を貧しい人々に施します。また、誰からでも、だまし取つた物は、それを四倍にして返します。」ザアカイは自分の罪を悔い改め、新しい生き方をしていくことを決意したのです。ザアカイは自分の利益のために徴税人の仕事をするのをやめ、正しく生きることになりました。まず、彼は今まで貯めたお金の半分を貧しい人びとに与えることにしました。そして、今まで不正に取り立てた分は四倍にして返すと誓いました。四倍にして返すとなるとかなりの額になり、自分の財産はほとんど残らなかつたかもしれませぬ。しかし、ザアカイはこのことを進んでやると言つたのです。このように、イエスのあたたかい愛に接したザアカイは、生き方が具体的に変えられていきました。愛によつて新しい人生を歩み始めたのです。

イエスはこのザアカイの言葉を聞いて、「今日、救いがこの家を訪れた」と言いました。イエスはさらに、「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである」と言いました。ここで、イエスは自分が来

たのは、正しい、善なる人を導くためではなく、ザアカイのように罪に陥った人を赦し、愛して、新しい人生を歩ませるためだ、と語っています。

このザアカイの物語からわかることが二つあります。まず第一に、人が過去に罪を犯してしまったとしても、それでも神はその人を愛しているということです。罪を憎んで人を憎まず、という言葉があるように、神はどんな罪人であってもその人自身を愛しているということです。第二に、人は自分が本当に受け入れられたと感じたとき、具体的に人生を変えたいと思う、ということです。ザアカイは、イエスによって罪が赦され、自分が真に受け入れられたと感じました。そこから、今までの罪を心から悔い改めて具体的に人生を変えました。財産を貧しい人々に分け与え、不正に得たものを返すという具体的な行動を取ったのです。人間は本当に深く受け入れられたとき、愛されたときに、人生を具体的に変わっていききたいと思うのです。

《祈り》

神様、今日はザアカイの物語について学びました。あなたが罪深いザアカイを赦し、愛したように、私たちがどれほど罪深くて、あなたは私たちを赦し、愛してくれていることを思います。その深い愛を思い出しつつ日々を過ごしていきたいと思います。この祈りをイエス・キリストの御名によってお捧げします。アーメン



真ん中に出なさい

経営学部教授 松村尚彦

ルカによる福音書 六章八節

イエスは彼らの^{かんが}考えを見抜いて、^て手の萎えた^{ひと}人に『^た立つて、真ん中^{なか}に出なさい』と^い言われると、その^{ひと}人は起き上^あがって立^たった。

(聖書協会共同訳)

日本の中学校や高校では、新学期が始まってしばらくすると、生徒の間でいつの間にか序列が決まってしまうことがあるそうです。スポーツの能力や、顔や体の見た目などによって、一軍、二軍というような序列ができるというのです。また一度、こうした序列ができあがると、同じ序列の人だけでグループを作り、上位の者が下位のものを軽んじるという傾向があるそうです。もしかしたら、皆さんの中にもそうした経験をしたり、あるいは経験をさせられたという人がいるかもしれません。ある教育学者は、これがないとなくならない「いじめ」の背景の一つだと考えています。

いじめのニュースを聞かたびに、本当に心が痛みます。たしかにそこには暴力や脅迫はないかも知れません。しかし「シカトされる」「クスクス笑われる」といったことは、「実体的な被害」はなくても、「やられる当人は、死ぬほどつらい」ものです。そこでは人の命を押さえつけ、押しつぶすような無言の力が働いています。

先ほどお読みした聖書の箇所に出てきた「手の萎えた人」も、こうした苦しみを負った人でした。手が萎えているということは、彼にとって肉体的に苦しいだけではありませんでした。それは彼にとって、恥ずかしいことでもありました。当時の宗教的な観念では、病気があるということは、その人が罪を犯したからだと考えられていたため、彼は人に会うたびに、冷たい、蔑みの目で見られていたからです。

こうしたことから彼は、神様を礼拝する時でも、いつも会堂の隅で小さくなりながら、極力目立たないようにしていました。そのような時にイエスが会堂に入ってきたのです。イエスは直ぐに会堂の片隅にいる彼を見て、彼がどんなに苦しい思いをしてきた人であるかを感じとり、心を揺さぶられます。しかし周りにいる人々は、この手の萎えた人には関心を示しません。ただ仲間外れにされて、いつも小さくなって

いるこの人に対して、いったいイエスは何をするのだろうか、興味本位の目で見ていただけです。皆に目立たないように、隅の方で小さくなっている人と、その人の苦しみには無関心なまま、遠くから見ている人がいる。やはりそこでも人の命を押しつぶすような無言の力が働いています。

この時イエスは、手の萎えた人に、こう言いました。「立って、真ん中に出なさい」と。するとそれまで会堂の隅の方で小さくなっていた彼は、スクッと起き上がって、皆の真ん中に立ちました。そこには、生まれてはじめて、自分に向けられた温かい眼差しによって、息を吹き返し、本来の自分を取り戻した人がいました。実は「立つ」と訳された元の言葉は、ギリシャ語のエゲイローという言葉で、そこには「本来の良い状態へ回復させる」という意味があるそうです。そう考えると、この手の萎えた人が「起き上がって、真ん中に立った」ということは、彼が人としての尊厳を取り戻し、全き人間として回復したことを意味している、と言うことができるでしょう。

それと同時に、そこでは驚くべきことが起こりました。隅に居た人が真ん中に出て、真ん中にいた人たちが、後ずさりをしながら、その人のために席を譲るという「逆転現象」が起ったのです。つまり、今まで彼を蔑み、疎んじてきた人々と、そうした人々からのあざけりに苦しんできた彼との関係が「ひっくり返った」のです。

聖書の中には、今日の手の萎えた人と同じように、人々から蔑まれ、苦しんでいる人が、神様との出会いによって立ち上がり、人間として回復し、新しい人生を歩み始めるという物語が沢山でています。そしてこの神様の働きは、聖書の物語だけに留まるものではありません。そうではなく、現代に生きる私たちの生活の中でも、いたるところで経験することが出来るものです。

たとえば、仙台では、多くのクリスチャンの方々が、ホームレス支援の活動に携わっておられます。そうした支援の場で働く方に聞いた話ですが、その方が出会ったホームレスの中に、学校時代に酷いじめにあって、人が怖くなり、社会に適応することが難しくなった人がいたそうです。その方は、当初は支援の手を差し伸べる教会の方々に対しても警戒をして、支援を拒んでいたと言います。しかし牧師と支援者の方々が、丁寧なその方に接し続けたことで、少しずつ心を開き、今では生活保護を貰いながら、屋根のある家に住むことができるようになりました。しかもそれだけではありません。今度は、その方自身が、ホームレスを支援する側になってボランティアとして働くようになったのです。かつての自分と同じように路上で生活する人々に声をかけ、支援の現場につなげて、食事を提供し、話を聞くように変わっていったのです。支援の場に来られるホームレスの方の中には、はじめは「俺はいいんだ」と言いながら心を閉ざして、なかなか支援を受けたがらない方もいるそうです。しかし支援の場に、彼のような元路上生活者がいることに気づくと、少しずつ打ち解けて、最後は笑い合うような関係になることも少なくないと言います。

またこの支援の場には、嬉しいことに、一人の学院大の学生がボランティアで関わっているそうです。彼女は、時々仲間のお笑いサークルの学生を連れて、お笑いのライブを披露し、集まった人たちの心を和ませていると聞きました。このように人と人とのつながりが、人間を回復させ、共に生きるようになっていく。そのような神様の働きを皆で喜び合える場があるということは、本当に素晴らしいことだと思えます。今日の聖書の箇所は、こうした神様の働きに期待しながら、私たち一人一人が人と関わり、共に生きるようにと、語りかけているのではないかと思います。



人生を変える秘訣

地域総合学部准教授 大澤 史 伸

マタイによる福音書 一四章一七～二二節

17弟子たちは言った。「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」18イエスは、「それをここに持つて来なさい」と言い、19群衆には草の上に座するようにお命じになった。そして、五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで祝福し、パンを裂いて弟子たちにお渡しになり、弟子たちはそれを群衆に配った。20人々は皆、食べて満腹した。そして、余ったパン切れを集めると、十二の籠いっぱいになった。21食べた人は、女と子どもを別にして、男が五千人ほどであった。

(聖書協会共同訳)

みなさん、こんにちば。私は地域総合学部・地域コミュニティ学科の教員の大澤史伸おさわし のぶといいます。大学では、「社会福祉概論」や「市民活動論」「NPO論」などを教えています。どうぞよろしく願います。

ところで、みなさんは、朝ドラを見ているでしょうか？私は、NHK連続テレビ小説「虎に翼」を見ています。もちろん、仕事があるので、毎日見ることはできません。時には、録画をして見えています。内容は、日本初の女性弁護士であり、初の女性判事および家庭裁判所長になった三淵嘉子みぶちよしこさんの実話に基づくストーリーです。

主役は伊藤沙莉いとうさおりさんです。伊藤さんは、一九九四年千葉県で生まれました。現在、三〇歳です。兄は、お笑い芸人「オズワルド」の突っ込み担当の伊藤俊介いとうしゅんすけさんです。伊藤さんは、幼少の頃、両親が離婚して母に引き取られ、母と母の姉（伯母）に育てられました。ボロボロのアパートに暮らし、三枚の布団で家族五人が寝る形だったということです。

伊藤沙莉さんは、その後、二〇〇三年、九歳でテレビドラマに出演しデビューをします。しかし、その後は低迷期が続きます。通っていた学校でのあだ名が『売れない子役』だったそうです。もちろん、朝ドラのオーディションにも何度も落ちたそうです。そして、ようやく念願がかない今回の主役をゲットすることができました。

伊藤沙莉さんは、ある意味で、自分の人生に奇跡を起こすことができた人だといえると思います。私たちの人生も自分の夢を叶え、これまでの失敗続きの人生から成功人生へと向かうためには何が必要なのか？今日の聖書の箇所にも「ある奇跡」の話が出ています。自分の人生に奇跡を起こすためには何が必要

なのか？共に聖書を学んでいきましょう。

私たちの人生に「奇跡」を起こすための第一の方法は、

① 小さな一歩を踏み出すこと

聖書を見て下さい。二七ページです。一七節から読みます。弟子たちは言った。「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」これはどういうことかというところ、イエスは大群衆に食事を与えなさいと弟子たちに命令をしました。大群衆とはどのくらいの人数かというところ、二一節にあります。食べた人は、女と子どもを別にして、男が五千人ほどであった。とあります。つまり、女と子どもと男全員を入れて考えるならば、およそ一万人ぐらいであったことが分かります。

一万人に食事を与えるとなると、かなりの食事がなければなりません。それに対して、弟子たちは答えます。一七節です。「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」きつと弟子たちは、こう思ったはずですが、一万人以上の人々の食事を準備するにあたり、パン五つと魚二匹ではどうすることもできない。と。それに対して、イエスは言います。一八節です。イエスは、「それをここに持って来なさい」と言い、とあります。そして、最終的にはどうなったかというところ、二〇節を見て下さい。人々は皆、食べて満腹した。とあります。つまり、弟子たちの持ってきた「五つのパンと二匹の魚」を持ってくるという、私たちから見ると一万人の人々の必要を満たすことが到底することができないと思われる小さな小さな行動が人々を満腹にしたという奇跡をここに見ることができます。「あなた」の小さな第一歩が大きな奇跡を起こすのです。

② 与えられたものに感謝をすること

あなたの人生に奇跡を起こすための二つ目のポイントは、与えられたものに感謝をすることです。一九

節を見て下さい。群衆には草の上に座するようにお命じになった。そして、五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで祝福し、パンを裂いて弟子たちにお渡しになり、弟子たちはそれを群衆に配った。とあります。イエスは、弟子たちが持ってきたわずかばかりの「五つのパンと二匹の魚」を、天を仰いで祝福し、つまり、感謝をしていることが分かります。

一万人の人々のお腹を満たすために、弟子たちが持ってきた「五つのパンと二匹の魚」に対して、イエスは、「これでは一万人のお腹を満たすことはできない」とか、「何で食事の準備をしていないのか」などと言って弟子たちを怒ってはいません。それどころか、弟子たちの持ってきたわずかばかりの「五つのパンと二匹の魚」を神様に感謝をしています。そして、最終的には、二〇節にもあるように、人々は皆、食べて満腹した。のです。私たちは知らなくてはなりません。どんなに小さなことにも感謝をする時に、何かが変わるのです。小さなことに感謝できる人が大きな奇跡を起こすことができるのです。

自分の持っているものを馬鹿にしてはいけません。自分にできることがどんなに小さなことであってもそのことに素直に感謝するべきです。人が何を言っても気にする必要はありません。今は小さなことしかできなかったとしても感謝をして、そのことを続けていくならばそのことはやがて大きく実を結び、自分の人生を変える、自分の人生に奇跡を起こす大きな変化につながっていくのです。

③ 与えられているものを無駄にしないこと

三つ目のポイントは、「与えられているものを無駄にしないこと」です。二〇節を見て下さい。人々は皆、食べて満腹した。そして、余ったパン切れを集めると、一二の籠いっぱいになった。とあります。イエスは、一万人の人々を満腹にさせた後に余ったパン切れを集めるといふ行動をしています。自分に与え

られている全てのものを無駄にしてはいけません。自分に与えられている、いのち、時間、お金、能力等です。それらが無駄にすることなく、意味のあることに使うのです。自分に与えられているものを無駄にしない時にあなたの人生は変わるのです。

最後に、あなたのために祈りをしたいと思います。

《祈り》

神様、どうぞ私たちが自分の人生を良きものにすることができるよう、奇跡を起こすことができる力を与えて下さい。今日の聖書のメッセージのように、①小さな一歩を踏み出すこと、②与えられたものに感謝をすること、③与えられているものを無駄にしないこと、によって人生を良きものに変えていくことができるように、私たちの人生に奇跡を起こすことができますように、助け、導いて下さい。このお祈りを私たちの救い主である主イエスキリストのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

隣人を自分のように愛しなさい。

私は主である。

(レビ記 19章18節)





「よく生きる」ということ

高等教育開発室副室長・講師 齋藤 渉

ルカによる福音書 一〇章二五～三七節

25すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」26イエスは言われた。「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか。」27彼は答えた。「『心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」28イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」29しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、私の隣人とは誰ですか」と言った。30イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追い剥ぎに襲われた。追い剥ぎたちはその人の服を剥ぎ取り、殴りつけ、瀕死の状態にして逃げ去った。31ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、反対側を通って行った。32同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、反対側を通って行った。33ところが、旅をしていたあるサマリア人は、その場所に来ると、その人を見て気の毒に思い、34近寄って傷にオリブ油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分の家畜に乘せ、宿屋

に連れて行って介抱した。³⁵そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』³⁶この三人の中で、誰が追い剥ぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」³⁷律法の専門家は言った。「その人に憐れみをかけた人です。」イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

(聖書協会共同訳)

今日お読みした聖書は、「善きサマリア人」というイエスの有名なたとえ話です。イエスは民衆に話するとき度々たとえを用いてわかりやすく話しました。本日はこのたとえを通して、東北学院大学で学ぶ知識や技能にとどまらず、「よく生きる」という観点を皆さんとともに考えていきたいと思います。

まずこのたとえ話の背景について、少し振り返りましょう。

このたとえ話は、古代パレスチナのお話で、エルサレムからエリコに至る険しい道で起きた話です。エルサレムは、昨今の中東情勢でも話題になる、宗教的な重要性が高い聖地であり、多くの信者が訪れる場所です。一方、エリコという街は、古くからの都市です。

このエルサレムとエリコの二つの都市を結ぶ道は、その険しさから強盗が出没する危険な場所として知られていました。

そこにある日、一人の男がエルサレムからエリコへ向かう途中で強盗に襲われます。

彼は財物を奪われ、重傷を負い、道ばたに残されます。そこに祭司とレビ人がその場を通りますが、彼

らはその男を見ても、手を差し伸べることはありませんでした。彼らはおそらく、宗教的な理由や、強盗がよくあらわれる地でもあり、自身の安全を考慮して、接触を避けたのかもしれませんが。

ここで重要なのが、サマリア人の登場です。

このサマリア人という人々は、ユダヤ人と同じ地域に住んでいましたが、異なる民族と宗教の背景にあり、ユダヤ人とは長い期間、敵対関係にありました。そのため、彼らは異教徒と見なされ、しばしば軽蔑されていました。しかし、このサマリア人は、一人の男が倒れているところに通りかかり、宗教的な背景や教え、民族の違いを超えて行動し、この男性を助ける行動をしました。彼は、傷ついた男を自らのロバに乗せ、彼の傷を手当てし、安全な場所へと運んだのです。それだけにとどまらず、このサマリア人は治療費を預け、不足する場合には、帰りに支払うことを約束して立ち去りました。ちなみに宿屋に渡したデナリオンとは当時の貨幣の単位であり、おおよそ一デナリオンが一日の賃金にあたる金額といわれ、このたとえばでは二日分の賃金に相当するお金です。

では、このたとえ話から私たちはなにを考えることができるでしょうか。本日の聖書の箇所である「善きサマリア人」のたとえは、決して、ただの古い話ではありません。このお話は、私たち一人一人が日々直面する「選択」に深い意味をもたらしてくれるのです。

私たちは、大学生活の中であらゆるコミュニティに属しています。たとえば学部・学科・グループ、課外活動、アルバイトなど一つにとどまらず、様々なコミュニティに所属し、多様なつながりを持つ機会を得ていますその一つ一つが、将来の自分自身の姿や、価値観、人格を形成していきます。つまり、大学生活の経験を通じて、社会とのつながりを持ち、東北学院大学を卒業し社会に出る準備となる四年間を意味

しています。そこで、皆さんに問いたいことは、日常生活の中で「善きサマリア人」としての行動を意識することの重要性です。

それは、単に困っている人を助けるということにとどまることではありません。この話の大事な部分は、人々が直面している問題や課題に対して、困っている人を放っておかず、この「善きサマリア人」の行動のように、見返りを求めずに、可能な限りの支援や手助けを提供することを意味しています。それは、私たちの心を豊かに成長させるだけではなく、世の中に平和をもたらしものです。

つまり「善きサマリア人」として、ただの一時的な施しをするのではなく、継続的な優しさ、多様な人々への理解をすることにつながっています。

このキャンパス内外で、身近な人々が困難に直面しているとき、だれが隣人であるかということを線引きするのではないのです。すなわち、分け隔てなく、自分のできる限りのことをすることが、「隣人を自分のように愛する」ことであります。

このような精神が、この東北学院では、「LIFE LIGHT LOVE」としてスクールモットーとして、示されています。LIFE（いのち）とは、有限な生命体の命と、神が自らの似姿として創造された個人の尊厳を互いに大切にすることです。LIGHT（ひかり）とは、学問や科学の成果によって新しい時代を切り開くことです。LOVE（あい）とは、隣人愛をもって地域や世界に仕えることです。

本学では、一九二三年の関東大震災の際には、同窓会が中心となり、被災者の救済・支援、慰問等を行いました。また、二〇一二年三月一日の東日本大震災においては、被災地にある大学として、三月二十九日には災害ボランティアステーションを設置し、被災地の復旧復興の支援に様々な形でかかわって

きました。この災害ボランティアステーションは二〇二三年度には総合ボランティアステーション（TCV-net）として、災害にとどまらず大学として社会とのつながりをつくり、学生たちが自ら社会に出てボランティアという形で善きサマリア人としての活動につながっています。このように東北学院の一三八年の歴史の中で、先人たちが「善きサマリア人」として伝統を築き引き継がれてきた「証」でもあり、皆さんはその歴史をつなぐ大切な一人でもあります。

まとめますと、隣人を自分のように愛することは、「よく生きる」という命の営みを意識することでもあります。皆さんは本学での学びを経て、世の光、地の塩として活躍されることが、本日の聖書の箇所から読み解かれます。これからの大学生活の中では、良い時もあれば、困難な場面にも出会うことになるでしょう。そのような時、本日の善きサマリア人のたとえを思い出しながら、皆さんが「よく生きる」ことについて考える時間が持てることを祈っています。

きょうだいたち、あなたがたは自由へと召されたのです。

ただ、この自由を、肉を満足させる機会とせず、

愛をもって互いに仕えなさい。

(ガラテヤの信徒への手紙 5章13節)





良い言葉を聴こう！

日本基督教団 仙台東一番丁教会牧師 瀬谷 寛

マルコによる福音書 七章三一―三七節

31 それからまた、イエスはティルスの地方を去り、シドンを経てデカポリス地方を通り抜け、ガリラヤ湖に來られた。 32 人々は耳が聞こえず口の利けない人を連れて来て、その上に手を置いてくださるようにと願った。

33 そこで、イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出し、指をその両耳に差し入れ、それから唾を付けてその舌に触れられた。 34 そして、天を仰いで呻き、その人に向かって、「エッファタ」と言われた。これは、「開け」という意味である。 35 すると、たちまち耳が開き、舌のもつれが解け、はっきりと話すようになった。 36 イエスは人々に、このことを誰にも話してはいけない、と口止めをされた。しかし、イエスが口止めをされればされるほど、人々はかえってますます言い広めた。 37 そして、すっかり驚いて言った。「この方のなさったことはすべて、すばらしい。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるようにしてくださる。」

(聖書協会共同訳)

わたしは、前の大学時代、四年間大学合唱団に所属していました。そのときに学んだことの一つは、歌に限らず、自分が演奏する音楽が上達するには、ポイントがあるのだ、ということでした。そのポイントは自分で音を出しながら、その音が正しく出されているか、自分の耳で聞くことができるか、という事です。自分で出した音をしっかりと耳で聞きながら、調整する能力があるかどうか、よい演奏家かそうでないかを分けるのです。語ること、しゃべることも同じで、明瞭にしゃべることができるのは、自分がしゃべりながらその音を自分の耳で聞くことができるからです。耳がポイントなのです。きちんと聞くことができちんと語る、ということのためには、とても大切です。この、主イエスに出会った人は、おそらく、耳が聞こえないということが原因で、しゃべることが十分にできなかった人ではないかと思われま

す。お歳を召した方、特に耳が少し遠くなられた方、というのは、とても不自由ではないか、と思います。そのような方は、周りから見てもよくわかります。お話になる声がどうしても大きくなるのです。聞くことがうまくできないことの不自由さは、語る、ということと密接にかかわりがあることを、教えられます。今日の聖書には、耳が聞こえず、口の利けない人が出てきます。三五節にも「舌のもつれが解け」とありますから、この人ははっきりと分かるように言葉をしゃべることが出来なかったのでしょうか。それは今言ったように、耳が聞こえなかったからです。そういう人が主イエスのもとに連れて来られました。人々は、その人の上に手を置いてくださるようにと願ったのです。主イエスが手を置いて下されば彼の障がいは治ると思ったからです。主イエスはこれまでに、様々な病気や障がい、その人に触れるだけで、あるいは全く触れることもなしに言葉だけでいやして来られました。耳の聞こえないこの人を聞こえるようにするぐらい朝飯前のことのようにも思えます。しかし主イエスのいやしの業はそんなに簡単にはなされま

せんでした。主イエスはまず、三三節「この人だけを群衆の中から連れ出し」たとあります。それは、いやしの業を、いやされる人との一対一の関係の中でなさうとしておられるということです。主イエスとの真実の出会いの中でこそいやしは行われるのであって、それなしに病氣や障がいのみがいやされてもあまり意味はないのです。

そしてもう一つのことが見えてくるように思います。それは、主イエスにとっても、この人をいやすことは大変なことであり、相当の集中を必要とすることだった、ということです。主イエスは指をその両耳に差し入れ、それから唾を付けてその舌に触れました。そして、天を仰いで呻き、その人に向かって、「エッフアタ」（開け）と言われました。

ところで、わたしたちの耳は開いているでしょうか。聞く（聴く）べき言葉を聴くことが出来ているでしょうか。本当にわたしたちを生かす言葉を聴くことができなければ、人を生かす言葉を語ることはできません。わたしたちは実にしばしば、言葉によって人を傷付けてしまい、また自分も傷付けてしまいます。

わたしたちは、神から離れた罪によって耳を塞がれ、主イエス・キリストを通して神さまが語ってくださったおられる恵みのみ言葉、わたしたちを本当に生かす命の言葉を聴くことができなくなっているのではないのでしょうか。本当に聴くべき恵みの言葉、命の言葉を聴くことができいないために、わたしたちの語る言葉も、はつきりしないものとなっているのではないのでしょうか。

わたしたちの語る言葉には毒が盛られていて、むしろ人を傷付け、殺す凶器になってしまいうことがわたしたちは体験しています。どうしてそういうことが起るのか。それは、わたしたちの心に憎しみや嫉妬や意地悪な思いがあるからです。そしてそういう思いがわたしたちの心にあるのは、わたしたちが本

当に良い言葉、自分を生かす言葉、自分と共に人をも生かす神様の恵みのみ言葉を本当に聴くことができないからです。そしてその恵みのみ言葉を聴くことができないのは、わたしたちがみ言葉に耳を塞いでしまっているからです。

良い言葉を聴きたいと思います。良い言葉とは何でしょうか、毒のない、人を傷つけ、殺すことのない言葉です。人を殺すのではなく生かす言葉です。わたしたちを生かす言葉とは、殺す言葉のもとになっている、罪から遠く離れた言葉です。罪を打ち負かす言葉です。一言で言えば、愛の言葉、赦しの言葉です。そしてそれこそが、主イエス・キリストの言葉です。イエス・キリストは、馬小屋で生まれ、十字架で死なれました。それは、神の御子の死であり、わたしたち人間の罪をすべて引き受けて死なれた死でした。このお方の、十字架の死によって、汚い言葉、悪い言葉の源である罪が完全に打ちのめされることとなりました。愛の言葉、赦しの言葉を、その生涯、その人生にそのものにおいて、語ってくださいました。その主イエスが「エッファタ」、開け、とおっしゃって、罪から解き放ってくださいます。罪に閉ざされた耳を、開いてくださいます。わたしたちは良い言葉、イエス・キリストの言葉を聴く者とされます。みなさんが、耳を澄まして、良い言葉、イエス・キリストの言葉を、この礼拝で聴き続けることができますように。

迫り来る神の愛

日本基督教団

仙台東六番丁教会牧師

中 本

純



ミカ書 四章一一～一四節

¹¹今、多くの国民があなたに敵対して集められ
こう言う。

「シオンが汚されるのをこの目で見届けよう」と。

¹²しかし、彼らは主の計らいが分からず

その計画を悟ることがない。

主は彼らを麦束のように打ち場に集めたのだ。

¹³娘シオンよ、立ち上がって、脱穀せよ。

私はあなたの角を鉄とし

あなたのひづめを青銅とし

多くの民を打ち破らせる。

あなたは彼らが略奪したものを主に

その富を全地の主に献げる。

¹⁴今、あなたは壁で取り囲まれている。

わたし

私たちは包囲の中に置かれ

彼らはイスラエルを治める者の頬を杖で打つ。

(聖書協会共同訳)

「四面楚歌」という四字熟語があります。敵の中に孤立して、もはや助けが無い状況を意味する言葉です。元は中国の楚の国の項羽が漢の高祖率いる軍勢に包囲されたとき、四方向を取り囲む漢の軍勢の中から自分の国の歌が聞こえてきて、楚の民がもはや漢の軍勢に降服したものだと思望した、という出来事が由来であると言われています。紀元前七〇一年、南王国ユダの都エルサレムもまさにそれと同じ状況に置かれていました。軍事大国アッシリアの軍勢に都を包囲されたエルサレムは国王ヒゼキヤをはじめ、国民すべてに至るまで生きた心地がしない状況下にありました。アッシリア軍の將軍は国王ヒゼキヤに対して、城門の開放と共に降伏を要求します。その言葉を聞いたヒゼキヤは『列王記(下)』一九章で「今日は、苦難と、懲罰と屈辱の日である」と言い、半ば自暴自棄な状態に陥ります。

しかし、こうした絶体絶命に思える状況の中にあつて、そうではなかった預言者が二人いました。一人は宮廷付きの預言者イザヤです。彼は「エルサレムがアッシリアの手に渡ることはない」と混乱状態のヒゼキヤに語りかけます。そしてもう一人が預言者ミカです。イザヤが国王の側に立ち預言していたのに対

し、ミカは国民の中に立って神の言葉を取り次ぎます。一一節で、エルサレムを取り囲むアッシリアは「シオンが汚されるのをこの目で見届けよう」と敵意をもって迫ってきます。しかし一見、「外的な部分での困難」を見て取れるこれらの出来事は、そこに至るまでのイスラエルの民と神様との関係における「内的な問題」を孕んだ罪の結果であることをミカは伝えるのです。神様から律法と預言者を与えられ、「神の民」とされながらも、悉く神に離反し、神と人に対して争いを繰り返してきたイスラエルの民の歴史がそこにはありました。そのように、イスラエルの人々がその罪をもって自ら招いてしまった国の危機であります。神様はあたかも高みの見物をして、喜んでいたりしません。「娘シオンよ、立ち上がって、脱穀せよ。わたしはあなたの角を鉄とし、あなたのひづめを青銅とし、多くの民を打ち破らせる」と語ります。つまり、自分たちの罪がもたらしたがゆえの国の危機であります。それでも神様は自らを選び出したイスラエルの人々を守り、力を振るう諸国をも神の勝利のもとにシオンの足もとに跪かせるとうのです。ひよっとしたら、ここまで語られている内容を御覧になってお分かりになった方もおられるかも知れませんが、これは「複合的な預言」なのです。どういうことかと言いますと、これまで語ってきた紀元前八世紀に起こったアッシリアによるエルサレムの包囲は、その後アッシリアがエルサレムを包囲している間に他国がアッシリアに攻め込む事態が勃発して急遽、アッシリアの軍は撤退していくこととなります。そのことによってエルサレムの危機は回避されます。それはまさに、預言者ミカを通じて語られた神の御言葉が実現されたことを意味しています。ですがそれだけでなく、ここでの預言というのは、「やがて来られる救い主イエス・キリストがあなた方を罪の包囲網から解放してくださる」ということをも内包して語られているのです。「今、あなたは壁で取り囲まれている…しかし、わたしはあなたを必ず罪の

ただ中から贖い出す」そう約束される神様はご自分の愛する独り子イエス・キリストを差し出し、その命をもって私たちをご自身のもとへと引き戻してくださったのです。

聖書に記されている戦争の記録というのは、一方では人間の罪がもたらした愚かな出来事や悲惨な出来事というものを包み隠さず伝えていきます。ですが、もう一方ではそうした愚かさの中に置かれた人間をとことん愛し、守り抜こうとされる神様の姿を伝えていきます。もちろん、私たちはいま戦争の最中に置かれている訳ではありません。ですが、この人生の中で「四面楚歌」と呼べるような絶体絶命の状況に置かれてしまった時（もちろん、場所や状況というものは様々ありますが）、私たちはそうした状況を「外的要因」に理由付けて、それで片付けてしまおうでしょうか。それとも、「内的な問題」として捉え、そうした中でも必死に私たちを足もとから支えている神様を見つめるようにされるでしょうか。ドイツの牧師であったディートリッヒ・ボンヘッファーという人はこういう言葉を残しています。「私たちが挫折するその時こそ、神は最も近くにいまし給うお方であって、決して遠く離れ給うお方ではない。」

聖書が伝える今から約二七〇〇年前の戦争の記憶は、現代を生きる私たち一人ひとりに対し、常に変わることはない愛をもって迫ってくる神様を伝え続けているのです。

《祈り》

天の父なる神様。

聖書は何千年の時を経ても変わることの無い人間の本质というものを伝えていきます。しかしその一方で、何千年の時を経ても変わることなく私たちを愛し続け、片時も離れようとされない神様の姿

を伝えています。どうか、私たちが決して一人孤独な存在ではないということを、あなたの愛を通して実感できるようにさせてください。

東北学院大学の学生お一人おひとりをお守りください。大学で働く教職員のお働きを支えてください。このお祈りを、イエス・キリストの御名によってお捧げいたします。アーメン。



あなたがたに新しい戒めを与える。

互いに愛し合いなさい。

私があなたがたを愛したように、
あなたがたも互いに愛し合いなさい。

互いに愛し合うならば、

それによってあなたがたが
私の弟子であることを、皆が知るであろう。



(ヨハネによる福音書 13章34-35節)

愛し、愛されて生きる

宗教センターチャプレン（仙台南伝道所牧師）

佐藤 由子



詩編 八四編一、二三節

1 指揮者^{しきしや}によつて。ギテイト^{ギテイト}に合^あわせて。

コラの子^こたちの詩^し。賛歌^{さんか}。

2 万軍^{ばんぐん}の主^{しゅ}よ

あなた^{あなた}の住^すまいはなんと慕^{した}わしいことでしょう。

3 私^{わたくし}の魂^{たましい}は主^{しゅ}の庭^{にわ}に思^{おも}い焦^こがれ、絶^たえ入^いりそうです。

生^いける神^{かみ}に向^むかつて、身^みも心^{こころ}も喜^{よろこ}び歌^{うた}います。

4 あなた^{あなた}の祭壇^{さだん}の傍^{かたわ}らに小鳥^{ことり}さえも住^すみかを見^みつけ

つばめも巢^すをかけて、雛^{ひな}を育^{そだ}てています。

万軍^{ばんぐん}の主^{しゅ}、わが王^{おう}、わが神^{かみ}よ。

5 幸^{さい}いな者^{もの}、あなた^{あなた}の家^{いえ}に住^すむ人^{ひと}は。

彼^{かれ}らは絶^たえずあなた^{あなた}を賛美^{さんび}します。

6 幸^{さい}いな者^{もの}、あなた^{あなた}を力^{ちから}とし

心^{こころ}の中^{なか}に大路^{おほじ}を敷^ひく人^{ひと}は。

7 嘆きの谷を通る者たちはそこを泉に変えます。

秋の雨がそこをまた祝福で覆います。

8 彼らは力から力へと進み

シオンで神にまみえるのです。

9 万軍の神、主よ、私の祈りを聞いてください。

ヤコブの神よ、耳を傾けてください。

10 神よ、私たちの盾を見てください。

あなたの油注がれた者の顔に目を向けてください。

11 あなたの庭で過ごす一日は

私の選んだ千日にもまさる。

神の家の戸口に立つことは

悪の特幕に住まうにもまさる。

12 神である主は太陽、盾。

主は恵みと栄光を与え

全き道を歩む者に

良いものを惜しむことはありません。

13 万軍の主よ。

幸いな者、あなたに信頼する人は。

あなたは

作詞・作曲 長沢 崇史

F Dm B $\flat$ F/A Gm C

あ な た を あ い し て い ま す も つ と ふ か く し り た い あ

5 F Dm B $\flat$ F/A Gm C

な た に か わ る も の は な い も つ と ち か く か ん じ た い まよあ

9 F Dm B $\flat$ F/A

な た は わ た し の み ち 義 の た い よ う - - - な

12 Gm C F Dm

ぐ さ め - き ぼ う の ひ か り - ゆ る が ぬ ど だ い - あ な た

15 B $\flat$ F/A Gm C F

は - と わ - に わ が す べ - て

みなさんが今、「愛してる」「大好きだよ」と伝えたい人は、どこにいますでしょうか。

「詩編」は、ヘブライ語で「テヒリーム（讚美・たたえのうた）」という書物名です。詩編は、苦しみや嘆きの詩が多い印象があるかもしれませんが、「神は、必ず嘆きを讚美に変えて下さる」という信頼があることを、私達は、原語の書物名から知ることができます。

またギリシア語訳では、「プサルモス（楽器の伴奏に合わせて歌う詩）」という書物名がつけられ、詩編は、ただの「詩集」ではなく、賑やかな「歌／詩（うた）」であることも分かります。

本日の「あなたは」という歌は、長沢崇史牧師（二〇二四年度秋の特別伝道礼拝・特伝企画 Special Music Service 講師）が作詞作曲をされた讚美歌ですが、詩編八一編と同じように、愛する人への歌です。「あなたを知りたい、あなたを感じたい」という情熱的な想いは、何千年も前に記された詩編の詩と響きあいます。

「私の魂は主の庭に思い焦がれ、絶え入りそうです。生ける神に向かって、身も心も喜び歌います。（三節）」

詩編作者は、自分に命を与えた創造主なる神へ、愛の詩を歌います。そして作者は、神と出会うことのできる場所を想い巡らせます。

「あなたの住まい（二節）」、「主の庭（三節）」、「あなたの祭壇（四節）」、「あなたの家（五節）」、「あなたの庭（一一節）」、「神の家の戸口（一二節）」

作者は、神を礼拝することのできる場所、神の都シオンの町を思い起こしています。「今は叶うことのない願いも、いつか必ず神が叶えて下さる」という信頼をもって、神の愛が溢れる場所で、神と共に過ご

す恵みと喜びの日々を思い描いて歌っています。

「あなたの庭で過ぐす一日は千日にまさる恵みです。主に逆らう者の天幕で長らえるよりはわたしの神の家の門口に立っているのを選びます。(新共同訳一一節)」

雨でも、雪でも、寒くても、暑くても、一瞬でもいいからあなたに会いたい。

そのように、愛する人と一緒にいることができる日を想い描くことは、今を生きる力となります。

一一節は、どのような豊かな生活も、愛する人に出会えない場所であるならば意味がないことを伝えています。愛する人に出会えるのなら、その家の外で立ち続けることのほうがどれほど幸せであるのかを、詩編は、私達に教えてくれるのです。

愛する方、それは主なる神です。私に命を与えて下さった神は、私を誰よりも深く愛し、どのような時も、どのような自分も、変わらずに愛し続けて下さいます。

主なる神と共に生きるとは、この世界にある全てのものにまさる幸せです。主の愛を受けて、主の愛に应えて生きる。愛し愛されて生きる日々が、どれほど大きな喜びであるのかを、詩編や讃美歌は、いつも私達に教えてくれます。

詩編は、カトリック教会もプロテスタント教会も、大切に読み継いでいる書物であり、宗教改革者のルターは、詩編を「小聖書」と呼び、またカルヴァン達も、「ジュネーブ詩篇歌」という讃美歌を完成させたほどに、私たちに「神の愛と神への愛」を教えてくれる書物です。

次の讃美歌は「神の子(岩瀬愛実)」という讃美歌です。

「何が出来ても出来なくても 何を得ても失っても ただ愛されてる 天の父に私は神の子」

神が私達を愛しているのは、私達側の問題ではなく、神が私達を「神に似た者」として造られ、神が私達を「神の子供」として下さり、「神と共に生きる」ことを望んで下さっているからです。

私達は、日々の礼拝を通して、神の愛を溢れるほどに受けてまいりましょう。

そして愛し愛されて生きることのできる恵みと喜びを、今日を生きる力としてまいりましょう。



光は今も輝いている

二〇二四年度 東北学院大学クリスマス礼拝説教

北陸学院高等学校 宗教部長 高田 恵 嗣

イザヤ書 九章一節

闇^{やみ}の中^{なか}を歩^{あゆ}んでいた民^{たみ}は大^{おお}いなる光^{ひかり}を見^みた。
死^しの陰^{かげ}の地^ちに住^すんでいた者^{もの}たちの上^{うへ}に光^{ひかり}が輝^{かがや}いた。

（聖書協会共同訳）

母校のクリスマス礼拝でご奉仕できることを感謝いたします。私は一九九七年に卒業していますから、卒業してから二十七年の月日が流れました。その後大学院を経て、牧師として歩み始めて二十五年目です。七年前から教会での奉仕を離れ、現在働いている石川県の北陸学院中学校高等学校で宗教部長として務めています。

さて、今回お声がけいただいた理由の一つに今年の一月一日に起こった能登半島地震がありました。私の住む石川県、特に北部の奥能登は震度七を記録し、甚大な被害をもたらされました。私はその地域からおよそ一〇〇km離れた金沢だったので、震度としては五強程度だったと思います。

その日のことを思い起こせば、私は娘と「一日は映画の日だ」と言って正月早々ですが映画を見に、近くの映画館へ行っていました。映画は十六時から始まったのですが、CMがあつて十六時一〇分に本編が始まりました。そして始まって五秒、強い揺れが始まりました。私は東日本大震災も経験しているのでとにかく地震が怖くて、娘に「頭を隠せ!」と大きな声で言いながら椅子の下にもぐり込みました。しばらく揺れました。そして揺れが収まったころにはスクリーンは大きく歪み、スプリングクラーからは大量の水が放出されていました。係員の方の大きな声に導かれ、映画館をでました。道路はすでに大渋滞です。海の近くの映画館です。津波が来るとの情報もあり、とにかく高い駐車場へと車ごと移動し、そこで夜まで過ごしました…。それが私の記憶です。その後も何かといういろいろありましたが…。正直に申し上げますと、あれから間もなく一年がたとうとする今、私はもう何ともないのです。普通に仕事に行き、普通に教員として教壇に立ち、クラスの担任として、あるいは部活動の顧問として働いている。でも、能登は違う。そこには「何ともなくない現実」がただ横たわっています。震災が昨日起こったのではないかと思うよう

な光景が今現在でも見受けられるのです。その被害の悲惨さは皆さんもご存じかと思えます。それだけではありません。さらに、二〇二四年九月二十一日から二十三日にかけて石川県能登半島で発生した豪雨災害、「能登豪雨」と名付けられたその自然災害は、目も当てられない事態となりました。これで心が折れた人も多かった…。

このような自然災害に見舞われた時に深く思われるのは人の温かさではないでしょうか。人と人の距離が縮まる時です。ボランティアの人たちにどれほど支えられたでしょうか。支援物資が届けられた時の喜び、水道が使えるようになった、電気が通った、その一つ一つがうれしい。何よりも見ず知らずの私たちの為に貴重な時間とお金を用いて支えてくれる人がいる。このような出来事を通して、改めて思われることは「人は人によって支えられるのだ」ということです。

しかし、被災地での現実には闇の部分もあるものです。非日常が突然訪れたのです。震災という非日常のなかでサバイバルを経験するのです。そこでは、日常と違った人の姿があります。日常では優しくった人が、優しくなくなったりします。大らかだった人が、細かな事で大きな声を出したりする。そしてそこには小さきまなまな争いがおこったりする…。しかも近い所から、家族の中で、親子で、姉弟（兄弟）で、親戚で…。近所の人同士で罵声を浴びせ合うようなことが起こったりもします。被災地で最もつらいことの一つが、この人間関係なのではないかと思うほどです。「人は人によって傷つけられるのだ」と改めて思われます。これは、私自身の個人的な感想かもしれませんが、東日本大震災の時もまた同じでした…。

東日本大震災、ここにいる大学生の皆さんであれば、幼稚園の年中さんから小二の三月十一日に震災を経験した人たちが多くいるのではないのでしょうか。私は、その当時仙台川平教会の牧師をしていました。

四人家族で私と妻、五歳と二歳の娘で震災の夜を過ごしたことを思い出します。その日、避難所に指定された小学校はすぐにいっぱいになったとの情報があり、私たちは家にも入れず、教会の駐車場でその当時乗っていた軽自動車で一夜を過ごすことにしました。結構強めの余震が十五分おきに起きていました。そして、その度にしっかりと怯えて過ごした夜です。子供たちがそれぞれ夜中に「トイレ」と言ってきます。仕方がないので外で用を足すのですが、その時ふと空を見上げました。そこには満天の星空が広がっていました。町中が停電していました。光と言えば道路に連なっていた車のヘッドライトくらいです。そんな中だからだったかもしれません。これまで見たこともないようなきれいな星空が広がっていたのです。寒空の中ですが、ふと私は変なことを考えていました。それは「人は、キレイなものはキレイだって思えるんだ」ということです。しっかりと怖がっていた夜です。恐れもあり不安もあった夜。これからどうなるのかと恐れていた中で、星を見てキレイだと思う自分。自分自身が不安な時は、全てが淀んで見えると自然に思っていた私には、そのキレイな星空はちょっとした発見だったのです。しかし、そんな小さな発見はその後の非日常の日々ですっかり忘れていました。私はその後教会の被災者支援センターで働くことになっていきます。私たちの活動の場所は津波の被災地でした。そこでも多くの方々と出会いましたが、そこで出会った一人のおじさんが同じようなことを言っていました。その方は津波で家々が流される中自宅の屋根に上り、一夜を過ごしたと言っていました。多くが流され、人も流されている中何もできなかったと大粒の涙を流しながら話してくださいました。しかし、その方も「でも、夜空だけはキレイだった」と話してくれました。人は、たとえ最悪と思える状況でも「キレイなものはキレイだ」って思える、これは本当かもしれません。

少し飛躍するかもしれませんが、「綺麗事」って言葉があります。あまりいい意味でつかわれない言葉です。でも、私はこの綺麗事っていうのも大切だと思っています。人は何が綺麗なことなのか、そして、それが見えているということが大切だと思うのです。人は綺麗な事、良い事のために生きたいと願うからです。そして私は聖書も「綺麗事」なのではないかと思っています。私たちは聖書を通して隣人を愛するように勧められます。私たちはそれぞれ闇を経験します。その闇に包まれている時に「愛」だとか、「平等」だとか、「赦し」だとか聞くと、「何が愛だ！現実はそのなりに甘くない」と言いたくなるのです。そして「綺麗事はもううんざりだ」そう思えてくる時があるのです。

私たちの抱える闇。これは言い換えるならば「自分にとって不都合な現実」を指すのではないかと思っています。そして、この自分にとって不都合な現実を抱えていない人など一人もいないのではないか、私はそう思っています。闇、それは、別な言い方をするならば自己中心的な思いから湧き上がる感情ではないか、そんな風にも思っています。この自己中心的な思いは、そのままいいわけがない。その自分本位の思いから立ち返る言葉、それが「綺麗事」なのだと思っています。そして、人は「キレイなものはキレイだ」と思える心を与えられている…。

聖書の言葉は神様のみ言葉です。私はその言葉を「綺麗事」と表現しました。もっと言うならば「綺麗事」である必要があるのです。私たちの抱える闇がそのままではいけないからです。私たちの抱える闇は、キレイな言葉で塗り替えられる必要があるのです。私たちの目標となる必要があるのです。

「闇の中を歩んでいた民は大いなる光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が輝いた。」

今日読んでいただいた聖書の御言葉です。注目していただきたいのは聖書は人の抱える「闇」を知っているということです。「死の陰」に住んでいる人を知っているのです。人の現実を知っている。もう死んでしまいたいと思っている人の思いだって知っている。しかし、その人たちに光が与えられたと告げているのです。

今日はクリスマス礼拝です。クリスマスを告げるエピソードには光が必ず描かれています。しかもそれは太陽のように日中を明るく照らす光としてではなく、決まって闇の中の光として描かれていることは注目に値します。「聖書が綺麗事なのではないか」という問いかけは、多くの人が抱える疑問や葛藤ではないかと思っています。人間の現実には闇に満ちていて、自己中心的で不完全な私たちが「愛しなさい」と言われても、どこか虚しく響くこともあるかもしれません。

しかし、聖書の中に描かれるキリストの言葉や生き方は、まさにその「綺麗事」の力を証明しています。「愛しなさい」というメッセージは、ただの理想論ではなく、闇の中で足元を照らす小さな光のようなものです。その光は、現実のすべてを変えるほど強烈ではないかもしれませんが、私たちが前に進む道を示し、希望を抱く助けとなります。映画館の足元を照らす誘導灯を知っているでしょうか、そのような光。クリスマスの夜に東方の博士たちを導いた星の光もあります。それらは目の前のすべてを明るくするわけではありませんが、確かに私たちを次の一步へと導きます。同じように、キリストの光も、私たちが抱える闇や絶望の中にあっても、進むべき方向を教えてくださいませんか。

キリストが私たちの間にお生まれになったのには理由がありました。それは、私たちの間に争いが絶えないからです。だから十字架に架からなければならなかった。ここにいてどれだけの人が共感してくれる

でしょうか。私にはわかりませんが、キリスト教が告げる最大のメッセージは「罪の赦し」です。イエス・キリストが十字架にかかり死刑となった。その死は私たちの罪の身代わりの死であったと、聖書はそう告げている…。私は現在、中高生の聖書の授業を担当しています。私がこの十字架による罪の赦しを語った時、ある生徒が真顔で「先生、そんなこと本当に信じてるんですか」って聞いてきました。この科学の時代にそんな話をどうしたら信じられるのか、そう聞いてきたんです。皆さんはどうお思いになるかわかりませんが、私はこの問いかけは非常に正直な問いかけだと思っています。しかし、この神が告げられた罪の赦しは世界を大きく変えたと思われています。「罪の赦し」と言いながら、確かに歴史を振り返れば数多くのキリスト者の戦い、殺し合った歴史があったことを知らされます。しかし、私はあえて言いたいです。その負の歴史に刻まれた何千倍、何万倍もの赦しの出来事がもたらされてきたことを。大きな出来事から、小さな出来事まで様々な赦しの出来事がもたらされてきたことです。

キリストの光は弱い、そう思うかもしれませんが。しかし、闇の中では唯一の光です。闇の中ではその光がまばゆい程の光として輝いている。

「闇の中を歩んでいた民は大いなる光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が輝いた。」

（イザヤ書 第九章一節）

この光は今も輝いています。この光の出来事を告げたのがクリスマスです。クリスマスおめでとうございます。この罪の赦しに感謝して歩みをすすめたい、そう思います。

きょうだいを愛する者は光の中にとどまり、
その人にはつまずきがありません。

(ヨハネの手紙一 2章10節)





光が世に来た

二〇二四年度 公開東北学院大学クリスマス礼拝説教

日本基督教団世田谷平安教会 主任牧師 江 間 紗綾香

ヨハネによる福音書 三章一六～二一節

16 神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。17 神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。18 御子を信じる者は裁かれぬ。信じない者はすでに裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。19 光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇を愛した。それが、もう裁きになっている。20 悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ない。21 しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神にあってなされたことが、明らかにされるためである。

(聖書協会共同訳)

クリスマスおめでとうございます。静かな夜、皆様と共に神様の御子イエス・キリストのご降誕を喜ぶことができ、うれしく思います。

さて、クリスマスとは一体どのような日でしょうか？多くの方がご存知の通り、イエス・キリストの誕生の日です。もう少し正確に言いますと、神様の御子が人となって、この世に降^{くだ}られた日のことです。では、何のために神様の御子が人となられてこの世へと来られたのでしょうか？私たちが命を与えられてこの地上で人生を歩んでいるのには意味があります。それは、神様から一人一人に地上での働きが与えられており、それを行うためです。それと同じように、あるいはそれ以上にイエス様の誕生にも意味があります。その意味を改めて、今宵与えられたみ言葉を通して共に考えていきたいと思います。

神様の御子イエス・キリストがこの世へと来られた理由は二つです。一つ目は、『独り子（中略）を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るため』（一六節）であり、二つ目は『御子によって世が救われるため』（一七節）です。実にシンプルでわかりやすい答えです。聖書は一貫して「神による人間の救い」について書いてある書物です。その救いの計画の中に、御子イエス・キリストによる救いがあります。なぜ、救う必要があるのかというと、私たち人間に罪があるからです。それを贖うために、イエス・キリストは十字架の死という道を歩まれたのです。神様は、私たちの内に罪がある状態を見過^みこされず、イエス・キリストをこの世へと遣わそうと決意されたのです。しかも、ただ救うだけではなく、独り子を信じる人々が一人も滅びることなく永遠の命を得ることを神様は望まれているのです。一人も〴〵ということは、信じる人すべてが永遠の命を得ることを望まれているということです。

なぜ、神様はそこまでして、独り子であるイエス・キリストをこの世へと遣わしたのでしょうか。それ

は、この『世を愛された』からです。神様はご自分が創られた世界が滅びることから救うために、独り子を犠牲にすることも辞さなかったのです。そもそも、神様は良いものとして人間を含むすべてのものを創られました。しかし、人間の自己中心的な思いによって人間は罪を犯すこととなりました。神様が創られたとはいえ、神様に責任はありません。そうであるにもかかわらず、神様は世が滅びることを良いとは思わず、むしろ世を救うために愛する独り子であるイエス・キリストを世へと遣わされたのです。ここで書かれている「独り」というのは、「代わりのきかない、唯一の」という意味が込められています。神様の御子はイエス・キリスト以外誰もおらず、代わりはいません。代わりがない中で、神様は世を救うために愛する御子を差し出したのです。

では、神様が独り子イエス・キリストを惜しまずにささげてくださった、愛する「この世」とはどのようなものなのでしょうか。先ほど少し触れましたが、世の始め、天地創造までさかのばれば人を含め神様が創られたすべてのものは、神様の目から見ても極めて良いものとして存在していました。しかし、最初の人間、アダムとエバが神様から命じられた約束事を守ることができず、罪を犯してしまいました。それから、人は罪を心に秘めながら歩むこととなります。長い人間の歩みの中で、遂には神様から離れてしまう人々が現れるようになってしまいました。彼らは、神様よりも自分自身を愛し、神様の目に悪とうつることを行うようになります。そうして、ますます彼らは神様から離れていったのです。こうした人々は、一九節にある通り『光よりも闇を好んだ』のです。それだけではなく、自分自身の悪い行いが明るみに出されることを恐れました。悪い事ややましい事をする、それが他の人にばれないようにと隠そうとすることは、現在の私たちにもあることです。自分ではそうした経験がなくても、周囲の人や、ニュース

などでそうした人のことを見聞きすることはあるでしょう。なぜ、自分の行いを明るみにされることを恐れるのでしょうか？それは、悪い事をやっているという自覚があるからだと思います。例えば法律に触れるような事であれば、処罰されることがわかっているからこそ、逃れるために隠そうとするのです。それと同じように、私たちは悪い者であることを知っているからこそ、神様の前に出ればそれが明らかになってしまふことを恐れるのです。それゆえ、彼らは悪を好むだけでは飽き足らず、光を憎み、光の方へと来ないようにしていたのです。

ところが、闇の中を歩む人々がいる一方で、光の方へ来る人々もいます。彼らは、イエス・キリストが私たちの罪を贖うために十字架にかかってくださったこと、そのために父である神様からこの世へと遣わされたことを信じている人々のことです。彼らは信じることでイエス・キリストが歩まれた道に従い、神様を愛し、隣人を愛し、そして神様と人とに仕える、そんな歩みをしていました。そして、闇を歩む人は自分の行いを隠そうとしましたが、光の方へと来る人々は、自らの行いをはっきりと光によって明らかにされることをよしとしました。むしろ、明らかにしなければならぬとしていました。なぜなら、彼らの行いが明らかになることによって、神様の働き（導き）も明らかになるからです。つまり、彼らの行いが神様から出たものであることを示しているのです。

イエス・キリストが遣わされた「この世」とは、光の方へと歩む人と闇の中を歩む人とが混在している状態のことです。残念ながらそれは当時だけではなく、今もなおその状態は続いています。極めて良いものとして創られた状態からどんなに大きく離れてしまっても、神様は世を救うために、イエス・キリストを遣わされたのです。神様の大きな愛、深い恵みがなければ、この救いの計画は行われなかったこ

とでしょう。

ここで心に留めておきたいのは、イエス・キリストは世を救うために遣わされたのであって、世を裁くためではないということです。確かに、闇の中を歩む人はいます。しかし、彼らはすでに裁かれていると聖書にはあります。神様がすでに彼らを退けているわけではありません。あくまでも、人間自身が神様から離れ、自ら裁きの道へと進んでしまっているのです。もし、神様が世を裁くために愛する御子をお遣わしになったとしたら。私たちの知っているキリストの働きは愛のないまったく違うものとなったことでしょう。神様は、光の方へ歩む人も闇の中を歩む人もいる「この世」を救うために、御子を遣わされたのです。つまり、それまで闇の中を歩んでいた人も、イエス・キリストと出会い、遣わされた意味を信じるなら、救いへと招き入れられているということができるのです。イエス・キリストという光は、「この世」にいるすべての人を等しく照らしています。その光の前に出るか出ないかは、私たちにゆだねられているということです。

イエス・キリストはベツレヘムでお生まれになりました。宿屋がいっぱい、馬小屋でお生まれになったと聖書には書かれています。当時は今のようによくの灯りがあるわけではありません。ろうそくのわずかな灯りと空に輝く星の中でお生まれになりました。たとえ小さな光であっても、やがてその光は私たちを大きく照らししてくれるものとなりました。あるフォトジャーナリストが自分の体験として次のような話をしていました。それは、山中を何日もかけて歩いて旅をしていた時のことです。その旅は一つの山を登山するのではなく、山をいくつも越えていくというものでした。当然、日が沈めばあたりは暗くなります。前も後ろも右も左もわからなくなるほどの暗闇に襲われます。次に出す足の方を間違えてしまえば、滑

落してしまう可能性があるくらい危険な状況です。そんな時、彼は装備していたヘッドライトをつけました。そうすると、自分の前、つまり行くべき道を照らしてくれるわけです。少し下を向けば自分の足元も照らしてくれる。そんな一筋の光が暗闇の中でただけありがたいことか、そして、その光を頼りにして自分の進む道を確かに歩くことができた。そうフォトジャーナリストが語っていました。この話を聞いた時、光の強さを感じるだけではなく、光を飲み込むほどの暗闇はないのだと思われました。

しかし、私たちのいる「この世」には、光を飲みこもうとするほどの暗闇に覆われている場所がたくさんあります。また、様々な問題を抱え、心を闇に覆われている人もたくさんいます。そのような「この世」に神様は愛する独り子イエス・キリストを光として遣わしてくださったのです。この光は、どのような暗闇にも負けることがなく、闇をあばき、人々を光へと導いてくれるものです。希望の光、救いの光が今、ここに来られたのです。どうしたら、私たちはその光を拒むことができるでしょうか。悪に負けることなく、また光を恐れることなく、光り輝いている場所（神様の救いのあるところ）を目指した先に与えられる恵みを覚え、御子のご降誕を待ち望む時を過ごしたいと思います。

《祈り》

主イエス・キリストの父なる神様、貴い御名を賛美いたします。

常に闇へと引きずり込まれそうになる弱い私たちのために光を与えてくださったことを心より感謝いたします。

神様が与えてくださった光に照らされて歩むことができますように。また、世界のすべての人にこ

の光が届き、神様の恵みと祝福とに心が満たされ、慰められますようにお願いいたします。
この祈り、私たちの救い主イエス・キリストの御名によって御前におささげいたします。アーメン

あなたは私の目に貴く、重んじられる。

私はあなたを愛するゆえに

人をあなたの代わりに

諸国の民をあなたの命の代わりに与える。

(イザヤ書 43章4節)





荒野の果てに

二〇二四年度 教職員クリスマス礼拝説教

大学宗教部長・宗教センター主任 原田 浩 司

ルカによる福音書 二章八―二一節

8 さて、その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。9 すると、主の天使が現れ、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。10 天使は言った。「恐れるな。私は、すべての民に与えられる大きな喜びを告げる。11 今日ダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。12 あなたがたは、産着にくるまって飼いの葉桶に寝ている乳飲み子を見つける。これがあなたがたへのしるしである。」13 すると、突然、天の大軍が現れ、この天使と共に神を賛美して言った。

14 「いと高き所には栄光、神にあれ
地には平和、御心に適う人にあれ。」

15 天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行つて、主が知らせてくだ

さったその出来事を見ようではないか」と話し合った。¹⁶そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼^かい葉^ば桶^{おけ}に寝^ねている乳^ち飲^のみ子^こを探^{さが}し当^あてた。¹⁷その光景^{こうけい}を見て、羊飼^{ひつじか}いたちは、この幼子^{おさなこ}について天使^{てんし}から告^つげられたことを人々^{ひとびと}に知らせた。¹⁸聞いた者は皆、羊飼^{ひつじか}いたちの話^{はなし}を不思議^{ふしぎ}に思^{おも}った。¹⁹しかし、マリアはこれらのことをすべて心に留^{とど}めて、思^{おも}い巡^{めぐ}らしていた。²⁰羊飼^{ひつじか}いたちは、見聞^{みきこ}きしたことがすべて天使^{てんし}の告^つげたとおりだったので、神^{かみ}を崇^{あが}め、賛美^{さんび}しながら帰^{かえ}って行^いった。²¹八日^{ようか}がたつて割礼^{かつれい}の日^ひを迎^{むか}えたとき、幼子^{おさなこ}はイエスと名付^{なづ}けられた。胎内^{たいない}に宿^{やど}る前に天使^{てんし}から示^{しめ}された名である。

(聖書協会共同訳)

二〇二四年も残すところ一週間となりました。今年を振り返りますと、元日の能登半島地震で一年の幕を開けました。能登では震災後初のクリスマスを迎えます。私たちにはあの二〇一一年三月十一日の東日本大震災の経験を思い起こさせます。震災は忘れ難い体験となりましたが、あの震災の発生から十四回目のクリスマスとなります。地震と津波により、東北の沿岸地域の広範囲が一瞬にして「荒野」と化しました。想像だにしない未曾有の犠牲をもたらしたあの時の辛く苦い経験は、語り部の口を通して、これからも語り継がれ、伝承されていくことでしょう。

今年の日本社会にもたらされたニュースの中に、太平洋戦争時にアメリカ空軍によって日本に投下された原子爆弾の被爆経験者たちが組織する「被弾協（日本原水爆被害者団体協議会）」の核廃絶運動に対してノーベル平和賞が授与されたというニュースがありました。先月、その授賞式が行われました。原爆と

いう、想像だにしない破壊力をもった軍事兵器によって多大な被害をもたらした、辛く苦い経験が被爆者たちによって綿々と語り継がれてきました。広島・長崎の爆心地もさることながら、戦争によって日本の各地が「荒野」と化しました。仙台も戦時中の空襲によって建造物は破壊され、荒野と化しました。しかし、復興し、制令指定都市として成長してきました。広島も復興し、成長しました。戦後八十年が経過しますが、あの時の経験者たちは既に九〇歳以上の高齢者となり、その実際の経験談を語れる人は一人もいなくなろうとしています。震災の語り部にしても、戦争の語り部にしても、彼らは自分たちが経験したただ一つの事実を語ってきました。一つの同じことを何度も何度も語り続けてきました。新作の物語を毎年毎年創作する必要はありません。自分がその目で見、その耳で聞き、その鼻で嗅ぎ、五感をとおして経験した「事実」を語り続けてきました。最初のクリスマスもそうなのです。この季節になると、毎年のようにクリスマスを記録する同じ聖書の箇所が読まれ、クリスマスを祝う同じ讃美歌が繰り返し歌われます。新しい物語ではなく、同じ一つの証言を、二千年以上語り続けてきました。先人が見て、聞いて、体験し、経験したことが、伝承され、継承され、語り継がれてきました。

今日二〇二四年十二月二十四日、私たちはクリスマス・イヴを迎えています。クリスマスは、神の御子イエス・キリストが、神であることに固執せずに、聖霊なる神の力によって、本来身ごもるはずのない乙女マリヤの胎から人間の肉体を採って、人間としてこの世にお生まれになったことを、祝い、神に感謝をささげる特別な礼拝を行う日であります。クリスマス（Christ-mas）とは文字通り、この世にお生まれになったキリスト（Christ）を礼拝する（mas）特別な日のことです。しかも、赤ん坊という、最も無力な存在として、イエス・キリストはこの世界にお生まれになった。この天地万物の世界を作られた、その

全能の力を持たれる神が、人の助けがなければ生きていられないような、しかも自分でできることはただただ泣き叫ぶことしかないような、全くの無力な人間の姿でお生まれになった、というその驚くべき全くの「あべこべの逆転現象」が、このクリスマスの奇跡の出来事の根底にあります。それはやがて、救い主、メシアとしてお生まれになったイエスは、十字架によって、罪人であるわたしたち人間が裁かれるのではなく救われ、そして義なるイエス・キリストが逆に裁かれるという「あべこべの逆転現象」へとつながる、測り知れない神の自己犠牲の愛、その不思議な神による救いの御業へとつながっていくのです。そして十字架の死から三日後に、このイエスが復活されました。この世界の通常であれば人間の命は「命から死へ」という一方通行ですが、「死から命へ」という、これも「あべこべの逆転現象」へとつながる、私たち人間にとって到底考えられない神の奇跡の福音へとつながります。先ほど申し上げた、日本で次々に起きた大震災や、被爆を伴う戦争体験、そして、今、こうして皆さんと祝うクリスマスも、それぞれが異なる次元の、この地上で生じた、これまでの常識では到底考えられない出来事として起こりました。そして、その一つ一つが歴史の中で綿々と繰り返し語り継がれ、継承され、そうして忘れ去られることなく繰り返し記念され続けてきました。

今年の教職員クリスマスでは、ルカによる福音書二章からクリスマスの知らせを伝える天使たちと羊飼いたちの物語に注目します。八節に登場するのが「野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた」羊飼いたち。そんな彼らの前に主の天使たちが現れ、一一節で「今日ダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである」と告げます。こうして羊飼いたちは初めて救い主（メシア）の誕生を知り、急ぎベツレヘムに駆けつけ、飼い葉桶に寝かされていた乳飲み子を探し当て、

彼らは神を崇め、讚美しながら帰っていきました。「神を崇め、讚美」する、その姿の中に、クリスマスを祝う礼拝の姿が示されています。

クリスマスの季節に歌われる讚美歌「荒野の果てに」を、先ほどご一緒に歌いましたが、この讚美歌にはラテン語のまま日本語に訳されていない歌詞があります。「グローリア・イン・エクセルシス・デオ」この言葉は今日の聖書では日本語に訳されています。「いとたかきところには栄光、神にあれ」。これが「天の大群」が、クリスマスの知らせとして伝えるメッセージです。しかし、天の大群が歌う言葉はそれだけではありません「地には平和、御心に適う人にあれ」。「地には平和（パックス・イン・テラ）」があるように。それが神の御心であることが、クリスマスの夜に羊飼いが聞いたメッセージでした。

聖書に登場する「荒野」、そして讚美歌で歌われる「荒野」とは、植物の生育にとって自然環境が厳しいイスラエルの乾燥した大地の様子を歌ったものです。神の御子がこの地に生まれるにしては、他にもっとよりよい自然環境の豊かな土地があるはずですが、しかし神は厳しいその荒野にお生まれになりました。しかし、もともと自然豊かな大地であっても、自然の猛威や、あるいは戦争によって人為的にたちまち一瞬に「荒野」と化してしまいます。大地震、巨大津波、そして近年の温暖化現象による線状降水帯の発生に伴い、河川が氾濫して生じた大規模な水害。相次いで自然の猛威を経験した今年一年でした。自然災害で傷ついた土地が「荒野」と化しました。そして今年もウクライナへのロシア軍の侵攻が継続し、国境地帯は「荒野」と化しました。そしてガザ地区をはじめとしたイスラエル・パレスチナの問題が、中東のイスラム地域に飛び火し、特にガザの町はすっかり破壊され「荒野」と化してしまいました。自然の猛威によって、また私たち人間の手で、人間が生み出した兵器によって、この世界に荒野が広がっています。

物理的な土地の面積の問題だけでなく、私たち人間の精神・心・魂にも罪という荒廃・荒野が押し広げられているかのようです。特殊詐欺や闇バイトといった強盗事件が若者たちの間で広がったのも今年の出来事でした。

さて、改めて今日の聖書には、私たち人間の姿を代表して、羊飼いたちが登場します。彼ら羊飼いたちは荒野で「夜通し」羊の群れの番をしていたと書かれています。つまり、彼らは日常の大半を夜の闇の中に身を置いていました。実はその「暗闇」こそ、まさに彼らの日常、彼らの人生を象徴しています。彼らの日々の暮らしは荒野の中、闇に覆われていたのです。

当時のイスラエル社会における羊飼いという職業は、畜産農家として羊たちの「飼い主」、つまり自分の財産として家畜を保有していたものではありませんでした。そうではなく、自分が仕える御主人さまが保有し、飼っている羊たちのお世話をするために雇われた職業でした。ですから、主人が飼う家畜動物のお世話をするというのは、多少露骨に言い換えれば「主人の家畜に奉仕する、家畜にも劣る奴隷」と揶揄され、軽蔑される職業でもありました。彼ら羊飼いたちは昼間の、つまりキラキラと輝く明るい「表側の」時間・空間を生きるのではなく、夜通し働く、つまり「裏側の」闇の中を生きている、生きざるを得ないのが彼ら、羊飼いたちの暮らしであり日常でした。イエス・キリストの誕生、最初のクリスマスのお知らせは、そんな荒野の中を生き、暗闇の中を生きる、暗黒の時間と世界に身を置く羊飼いたちに、まさきに届けられます。

さて、私たちが暮らすこの東北地方は、日本の他の地域よりも少子高齢化が急速に進行し、園児から大学生まで、年々入学志願者数が減少し続けるという危機的な状況が待ち構えています。今年も物価の高騰

が更に進みましたし、ガソリンの販売価格も高くなっただけですから、来年も輸送コストの上昇により、物価もまた上昇することが予想されます。「一寸先は闇」という言葉のように、先の見通しのきかない時代が続きます。

クリスマスは年間で最も闇の期間が長い十二月に祝われます。闇が世界を覆うただ中でクリスマスを祝います。「荒野の果てに、夕日は落ち」、世界を暗闇が覆います。しかしそこに、天使たちが闇を生きる羊飼いたち、闇の中を生きるわたしたちに「民全体に与えられる大きな喜びの」メッセージを伝えます。救い主メシアがお生まれになった。このお方こそ、この世界に「あべこべの逆転現象」をもたらすキリストである。闇に覆われた世界に「光あれ」と、第一声を発せられた神によって、この世界に「光」がもたらされる。この世界を照らし、この世の罪を贖われるメシアが、この世にお生まれになった。それはとても静かな夜に響いた天使たちのメッセージでした。

このイブ礼拝も昨年に続き、夕日が落ちた夜の開催となりました。闇の中にあつて東北学院は改めて「LIFE LIGHT LOVE」をこの地域に、そして世界に示すキリスト教の信仰に基づく教育機関であることを、改めて思い起こしたいと思います。二〇二四年のクリスマスの喜びと祝福が、今宵お集まりになられた東北学院の教職員の皆様お一人お一人と共にありますように。そして、まだまだ見通すことのできない二〇二五年も、神の導きのもと、東北学院の教育と運営に共に力と祈りを合わせて邁進してまいります。クリスマス・おめでとうございます！

《祈祷》

天の父なる神。二〇二四年のクリスマスを迎え、この世の闇を拭う救い主として御子イエス・キリストをこの世にお与え下さいました、あなたの尊い奇跡の御業と愛を覚え、心から感謝致します。今世界の各地では自然の猛威によって、また人間の暴力によって荒野が広がっています。闇の力が人間の心を覆うような出来事が後を絶ちません。主なる神、どうかこの世界を憐れみ、導いて下さい。あなたによって東北学院に示されている「LIFE LIGHT LOVE」のモットーを、私たちが進むべき道標として前進していくことができますようお支えください。どうか来る二〇二五年も、主の光のもとに平安と健康の内に私たち一人ひとりが過ごすことができますようお守りください。東北学院の真の創設者イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

あとがき

この二〇二四年は、元日夕方、最大震度七（地震規模M7.6）を記録した能登半島地震の発生により幕を開けました。二〇一一年の東日本大震災からの十三年間で、二〇一四年の熊本地震や二〇一八年の北海道胆振東部地震など、最大震度七を記録した大地震が日本各地で、記録的な頻度で起きています。さらに二〇二四年は前年以上に夏日が続き、年間の平均気温が平年比+1.6℃上回る、記録的に暑い日が続く一年となりました。抗うことのできない自然の猛威に翻弄された一年でした。また、今年は各国で次々に政治のリーダーが交代するなど、「これまでどおり」が通用しないこと、そして時代は変化することを痛感させられる一年でもありました。変わりゆく時代の中、変わることのない普遍性を具えているのが、聖書が示す神であり、その神に由来するのが「LIFE LIGHT LOVE」という、時代を貫く本学の教育モットーです。今年度も「LIFE LIGHT LOVE」に則して、東北学院で説教を語っていただいたすべての先生方、今号に寄稿いただいた先生方に感謝いたします。

悲しいかな、今年もロシア軍によるウクライナ侵攻や、イスラエル軍によるパレスチナのガザ地区攻撃などが継続する中、「日本被団協（日本原水爆被害者団体協議会）」の長年の平和活動にノーベル平和賞が授与されたことは、ノーベル財団が世界に示した政治的な平和のメッセージでもありました。私も東北学院も、キリスト教の信仰に基づく教育機関として、この世界に主の御心に適う「パックス（平和）」が来ますようにと、聖書的な平和のメッセージを願ひ続け、語り続けます。

（宗教センター主任 原田浩司）

私は確信しています。

死も命も、天使も支配者も、
現在のものも将来のものも、力あるものも、
高いものも深いものも、他のどんな被造物も、
私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から
私たちを引き離すことはできないのです。

(ローマの信徒への手紙 8章38－39節)



執筆者一覧

院長・学長・宗教センター所長

幼稚園園長

中学校・高等学校 宗教主任

中学校・高等学校 聖書科教諭

榴ヶ岡高等学校 宗教主任

大学宗教主任

大学宗教主任

大学総合人文学科長

大学宗教主任

大学宗教主任

大学宗教主任

大学宗教主任

大学宗教主任

大学宗教主任

経営学部教授

地域総合学部准教授

大西晴樹

島内久美子

松井浩樹

成智圭

西間木順

吉田新

川島堅二

木村純二

田島卓

藤野雄大

渡邊有美

椎名雄一郎

大門耕平

渡邊蘭子

松村尚彦

大澤史伸

高等教育開発室副室長・講師

日本基督教団仙台東一番丁教会牧師

日本基督教団仙台東六番丁教会牧師

宗教センターチャプレン（仙台南伝道所牧師）

北陸学院高等学校 宗教部長

日本基督教団世田谷平安教会主任牧師

大学宗教部長・宗教センター主任

齋藤 渉

瀬谷 寛

中本 純

佐藤 由子

高田 恵嗣

江間 紗綾香

原田 浩司

主イエス・キリストの恵み、
神の愛、聖霊の交わりが、
あなたがた一同と共にあるように。

(コリントの信徒への手紙一 13章13節)



東北学院礼拝説教集

第五号

二〇二五年二月発行

発行責任者

院長・学長・宗教センター所長

大西 晴樹

編集責任者

大学宗教部長・宗教センター主任

原田 浩司

印刷・製本

株式会社 阿部紙工

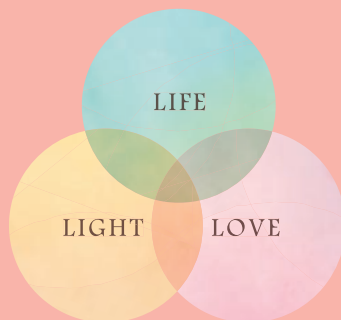
問い合わせ先

東北学院宗教センター

〒984-8588

宮城県仙台市若林区清水小路三十一

☎〇二二・三五四・八三一〇



2025年 2月
東北学院宗教センター発行